

郷土ちがさき



ちがさき 夏

第164号

発行日 令和7年9月1日
 発行者 茅ヶ崎郷土会
 会長 平野文明
 編集 平野文明

鷹倉社寺考に見る旧相模川橋脚橋材の産地 …… 加藤幹雄… 2
 大岡越前守忠相日記を読んでみた (二) …… 野田 穂… 9
 浜降祭伝説と御旅所神主鈴木丹波 …… 平野文明… 14
 『茅ヶ崎市史』四を読んでいます …… 平松和弘… 19
 風(自由投稿欄) ○長谷川由美オリヅル 20 ○川村恵ロンドンのト
 トロ 22 ○川村美子グランカナリア島 24 ○藤間克子遠き日 26

お盆が過ぎたころでした。夜中に目が覚めました。我が家の庭に人の声がします。誰だろう、変な奴らじゃなければいいがと外に出ると、昼間のような月明かり。

庭にある石のテーブルのそばに数人の男女が集まっていました。見たことのある人たちでした。いきなり、懐かしさが弾けました。

「あつ、ふみあきちゃんナ」と声をかけて来たのは父の妹、私の叔母でした。父の弟の叔父もいます。亡くなっている父も横に立って笑っていました。『どぎゃんしたツ?』私が聞くと、

「こん夏は雨ん多うて、村はひどかったバイ。山崩れは何力所もあつて、道は通れんゴツなつて、田んぼも畑も土手は崩れち、今から元ンごて戻すとはおおごつ(おお事)バイ」というのです。確かに中山間地域の私のふるさととは、高齢になり、人は減り、山は荒れ、田や畑は草木にのみ込まれ、猪・鹿・猿が我が物顔に動き回っているのです。

「そこつ(事)ば、本家の惣領息子に言うところて思うてナ、みんなして来たつタイ」、「たまにや戻つて来なつせ」というと、すうっと戻っていきました。

私は、白い月の光の中に残されました。

(茅ヶ崎郷土会々長 平野文明)

資料紹介

旧相模川橋脚の橋材はどこから来たか

『鷹倉社寺考』に見るその産地

加藤幹雄

はじめに

令和七年の二月、郷土会の勉強会において『鷹倉社寺考』と旧相模川橋脚』についてお話ししましたが、短時間であり、十分にお伝え出来なかったのでここにまとめて報告したいと思います。「鷹倉」は「高座(たかくら)郡」のことです。

筆者は以前より旧相模川橋脚部材の出所や架橋工事などに興味を持っておりました。偶然、「中島郷土史」作成作業中にこの旧橋脚が話題となった時、橋材はどこから調達したのだろうかという疑問を呈したところ、郷土会々員の町田悦子さんから、『海老名の地名』にそのことが記載されているとの情報を頂きました。これが契機となって調べた内容がこの報告です。以下、元々転載文に記載されている注釈は()、筆者が追記した注釈は【 】とします。

旧相模川橋脚について

まず、旧相模川橋脚を簡単に紹介します。

旧相模川橋脚は国道一号(東海道)と小出川が交差する茅ヶ崎市下町屋一丁目にあります。令和八年(二〇二六)で国指定史跡百周年を迎えます。大正十二年(一九二三)の関東大震災と翌年

一月の余震によって出現した橋脚は、地元萩園の和田精氏から歴史学者沼田頼輔氏に発見連絡がなされ、沼田頼輔氏の現地調査及び考証後、県に保存・保護が申請され、震災後の混乱期にも係わらず、三年後の大正十五年(一九二六)十月に国の史跡として指定されました。当時この橋脚の年代は歴史書『吾妻鏡』・『保暦間記』などを根拠として鎌倉時代の建久九年(一一九八)、源頼朝の御家人である稲毛三郎重成(いなげさぶろうしげなり)が亡き妻の三回忌供養のため相模川に架けた橋の橋脚とされています。この橋脚が発掘調査や木材の年輪年代測定によって鎌倉時代に造られた橋の橋脚であるとしても矛盾はないとされたのは平成十三年(二〇〇一)以降のことです。この発掘調査によって、橋脚の本数は十本、ヒノキ材で架橋された橋の規模は橋幅が約九メートル長さは四〇メートル以上と推定されています。茅ヶ崎で刊行された資料ではこの橋脚材の出所と稲毛三郎に関する報告等は見当たりませんが海老名市の郷土資料にそれがありますので以下に紹介します。

旧相模川橋脚の橋材はどこから調達したか

『海老名の地名』(*1) 九三頁から、「杉久保村(スギクボム

う) (二) 村名の由来」に書かれた稲毛三郎重成と相模川架橋についての箇所を転載します。

杉久保村

杉の生い繁った窪地が至る所にあつたことに由来する地名である。特に釜坂川流域は杉のよい生育地であつたと思われる。

建久九年(一一九八)十二月稲毛三郎重成が亡妻(北条政子の妹)のため馬入で橋供養を行うが、その橋材はこの地の産であつたとの伝えがある。馬入(相模川河口)までの距離が近く相模川を利用しての運搬に便がよかつたからと思われる。

『社寺考』『鷹倉社寺考』のことに「架の木【橋材の意】を重成、渋谷庄司の子遠馬三郎時国【おんまさぶろうときくに】及び大谷四郎某に乞ひ、大谷郷浜田・遠馬郷相久保村より採伐す。機材【ママ・橋材】運行に当たり明神の神護を得て無事に成願す」とある。なお豊受大神の旧名称は遠馬明神【おんまみょうじん】といい、ここで橋材の御祓いをし、その後相模川を下したとみられる。表記は『風土記稿』・『天保郷帳』では「杉窪村」、『旧高旧領取調帳』以下明治以降のものでは「杉久保」と記されている。

と書かれています。

要するに旧相模川橋脚の部材は海老名の大谷郷浜田と遠馬郷相久保村より採伐搬出されたとの言い伝えがあり、その出典は『社寺考』と書いてあります。では、出典の『鷹倉社寺考』(*2)にはどのように書かれているかを記します。

『鷹倉社寺考』に書かれている橋材と稲毛三郎重成

『鷹倉社寺考』に書かれている橋材と稲毛三郎重成に関連する記述は二か所あります。一か所は杉窪村の豊受皇太神に、もう一か所は門沢橋村の加牟之由明神【かむのいわれみょうじん】です。

その一 杉窪村 一二〜一三頁 豊受皇太神の説明の中に、稲毛重成が相模川架橋の際に絹布と神馬を奉納したことが次のように書かれています。

杉窪村 須岐久母牟良

旧遠馬郷【おんまごう】ノ本村ナリ。寿永治承(一一七七〜一一八五)ノ頃、遠馬氏コノ地ニ起ル。

豊受皇太神

旧遠馬十二ヶ村ノ総鎮守ナリ。神地二萬一千四百拾六坪ナリ。祭神豊受皇太神ヲ祀リ本宮トナス。別ニ天照皇太神ヲ祀リ別社トナス。当社ノ鎮坐年月ハ往古ニシテ不詳ナリ。但シ寒川名神ノ称宜、斉藤中務ノ「国社名鑑」ニ曰ク「相模国遠馬御鎮坐、遠馬名神。式外社、当国之大社也。」ト。古志ニ「遠馬郷杉窪邑式外社、遠馬名神、推古天皇六年(五九八)鎮坐。云々」。マタ先師ガ寒川名神「鷹倉社寺考」ニ曰ク「豊受皇太神、当社ハ往昔遠馬名神ト称セリ。当処ノ鎮坐ノ歲月ヲアキラカナラズ、但シ当社後背ノ山陵【伊勢山古墳群】ニテ勘考スルニ祭神ハ相模ノ国ノ国造ナラムカ木像一軀ヲ祀ル。コレ遠馬氏ノ祖神ナリト、但シ当処ノ地頭遠馬氏ノ祖神ニアラズ。渋谷庄司重国ノ子時国ソノ子重連当処ニ来リテ住スルハハルカ後ノ事ナリ。重連ガ祖々父重家【河崎重家】、禁裏ニ於テ、渋谷左中弁盛国ナル者酒粕ニ溺レ狂乱スルヲ押フ、依リテ盛国ノ処領ノウチ相模国鷹倉郡渋谷ノ庄ヲ賜フ。マタ重国寿永ノ頃(一一八二〜一一八五)大願アリテ寒川名神、渋谷八幡

遠馬名神ニ社殿ヲ寄ス。」一門氏【詳細不明…神職荒木田氏二門一族のことか?】一ノ称宜行元ノ古文ニ見ユ。俚人マタ伝エテ曰ク「当社ノ勸請ハ靈龜元年(七一五)元正天皇御即位ノ年ト云フ。」御神体木像ナリ。乃チ遠馬名神ニシテ、文和三年(一一三四)甲午ノ年足利直冬ナル者ノ願文ニ曰ク「凶徒退治祈禱事、近日□(ママ)殊可致請誠元状如件。文和三年甲午正月、源直冬」上【ママ】。遠馬大名神御宝前。別当上宮寺、云々。マタ北条新九郎ノ願文「東郡渋谷庄遠馬明神云々」寛永十二年(一六三五)当社ノ社人某、松平信綱老中ニ補セラレ、始メテ寺社奉行ヲ置カルトキ、遠馬名神ハ伊勢大廟御東行ノ処、一条天皇長保三年(一一〇一)神領ト成リヌ、乃チ仁明天皇ノ御宇、伊勢神宮騎馬ニテ現ジ給ヒ一軀ノ神像ヲ得タリ。依リテ伊勢神廟ニ写シ社殿ヲ建ツト、云々。乃チ遠馬名神改メ豊受大神ノ官許ヲ得ル。寛永十二年(一六三五)二月別当上宮寺ノ文庫災禍災(ママ)上シ古文古記録ノ多クヲ失フ。社宝モマタ鳥有ニ帰ス。治承四年(一一八〇)七月社殿造営、遠馬三郎時国及ヒ渋谷庄司重国。建久年中(一一九〇)(一一九九)、武蔵国ノ大名小山田重成【小山田重成は稲毛重成のこと】、湘江架橋ノ砌リ当社ニ絹布ヲ寄進ス。安元二年(一一七六)丙申九月庄司重国社領二段余寄進。建久六年(一一九五)七月稲毛入道【稲毛入道は稲毛重成のこと】愛馬ヲ神馬トシ献ズ。宝徳(一四四九〜一四五二)ノ古文ニ「遠馬郷ノ内相窪村河内村百姓前之分夏秋【意味不明。作物のことか?】二十五貫文ニテ候。是寄進申候者也仍如件。宝徳二年(一



海老名市杉久保北2 豊受大神



海老名市門沢橋4 渋谷神社

四五〇)重陽吉日。從五位下學士亮顯。別当上宮寺内記。」ト。マタ永祿五年(一五六二)二月「東郡渋谷庄遠馬名神御神領二十五貫文。相權守。【ママ…詳細不明】」ヲ藏ス。この文を見るとこの地は渋谷庄であり綾瀬市にあった早川城主渋谷重国【平治の乱(一一六〇)の際、源義朝に味方し所領を没収された佐々木秀義を二十年間渋谷庄に匿ったことで有名。秩父一族】と息子の時国が治承四年に豊受大神造営や、安元二年に社領を寄進し、豊受大神を保護したことが分かります。またその二で述べる加牟之由明神でも渋谷重国が宝殿造営を行っています。

ここに書かれている遠馬郷相久保村は東名高速海老名パーキングエリアのすぐ南側一带にあたります。豊受皇太神は現在、豊受大神と神社名が変わり、杉木立に囲まれて静かに佇んでいます。鳥居の前に平成二十八年(二〇一六)に修復された神社説明板が



ニシテ、門沢橋村、入内島村ノ鎮守ナリ。往昔ハ寒川名神ノ御支枝ニシテ、祭神加牟之由之命、又ハ加牟之由比古命ト称ス。寿永年中(一一八二)一八五)渋谷庄司重国当社宝殿

加牟之由明神 神寿明神ト称ス。下海老名郷ノ総社ニシテ、門沢橋村、入内島村ノ鎮守ナリ。往昔ハ寒川名神ノ御支枝ニシテ、祭神加牟之由之命、又ハ加牟之由比古命ト称ス。寿永年中(一一八二)一八五)渋谷庄司重国当社宝殿

ありますがそこには何故か稲毛三郎に関するところは書かれていません。
その二二〇三二頁 門沢橋村の欄に書かれている稲毛三郎と架橋について。ここでは加牟之由明神【※3 かむのいわれみょうじん】の説明の中に稲毛重成が架橋の際、この神社へ太刀を奉納したこと、及び遠馬三郎、大谷四郎に依頼し、大谷郷浜田、遠馬郷相久保より橋材を採伐したこと。橋材運行にあたり、明神の神護を得て無事に成願したことが次のように書かれています。

造宮ノコト安樂寺文書ニ見ユ。建久九年(一一九八)平入道稲毛重成、湘江馬入橋架橋ノトキ太刀一振りヲ当社ニ寄進ス。今神主金子掃部【カネコカモン】コレヲ藏ス。「保暦間記拾遺抄」ニ「稲毛入道亡妻供養ノ為メ湘江ニ橋ヲ架ケ給フ建久九年(一一九八)十月【ママ】」ト記ス。東鑑ニハ建久九年(一一九八)十二月ナリ。架ノ木ヲ重成渋谷庄司ノ子遠馬三郎時国及大谷四郎某ニ乞ヒ大谷郷浜田、遠馬郷榎久保村ヨリ採伐ス。橋材運行ニ当リ明神ノ神護ヲ得テ無事成願ス。当門沢橋村ハ金子伊予守(寒川社神主)ノ古文ニ依リ往事ハ遠馬領ニシテ庄司国重ガ子時国其ノ子重保(連)受領ス。依ツテ下渋谷領ト記ス。四条天皇嘉禎丁酉歳三年(一二三七)渋谷又太郎鎌倉郷ノ稻荷ヲ合祀ス。

僉【せん】スルニ四条天皇嘉禎三年(一二三七)ノ地頭ハ遠馬氏ナリ。重将渋谷ノ庄司重国ヨリ三代ノ孫從六位下左近将監トナル。吾妻鏡其ノ他ヲ僉スルニ、渋谷又太郎ナル者小沢太郎入道ニ属シ、承久三年(一二二二)六月十四日宇治合戦ニ大貫三郎、平出彌三郎ヲト共ニ敵ヲ討テルコト見ユ。乃チ遠馬三郎ガ身内ナルカ。コレ金子伊予守ノ古文ノ書キ写シノアヤマルカ、正覺寺古文ニ遠馬三郎殿身内、渋谷又太郎、入内島三郎、木内小次郎、金子十郎ト記ス。

ここに書かれた加牟之由明神はJR相模線門沢橋駅から南へ歩いて七、八分のところにあり、現在、神社名が渋谷神社に変わっています。この神社の説明板にも何故か稲毛三郎や架橋については書かれていません。

一方、橋材が切り出されたとされている大谷郷(大谷村)『鷹倉社寺考』四七頁では大屋郷大谷村の項には稲毛重成や橋材についての記述は見当たりません。

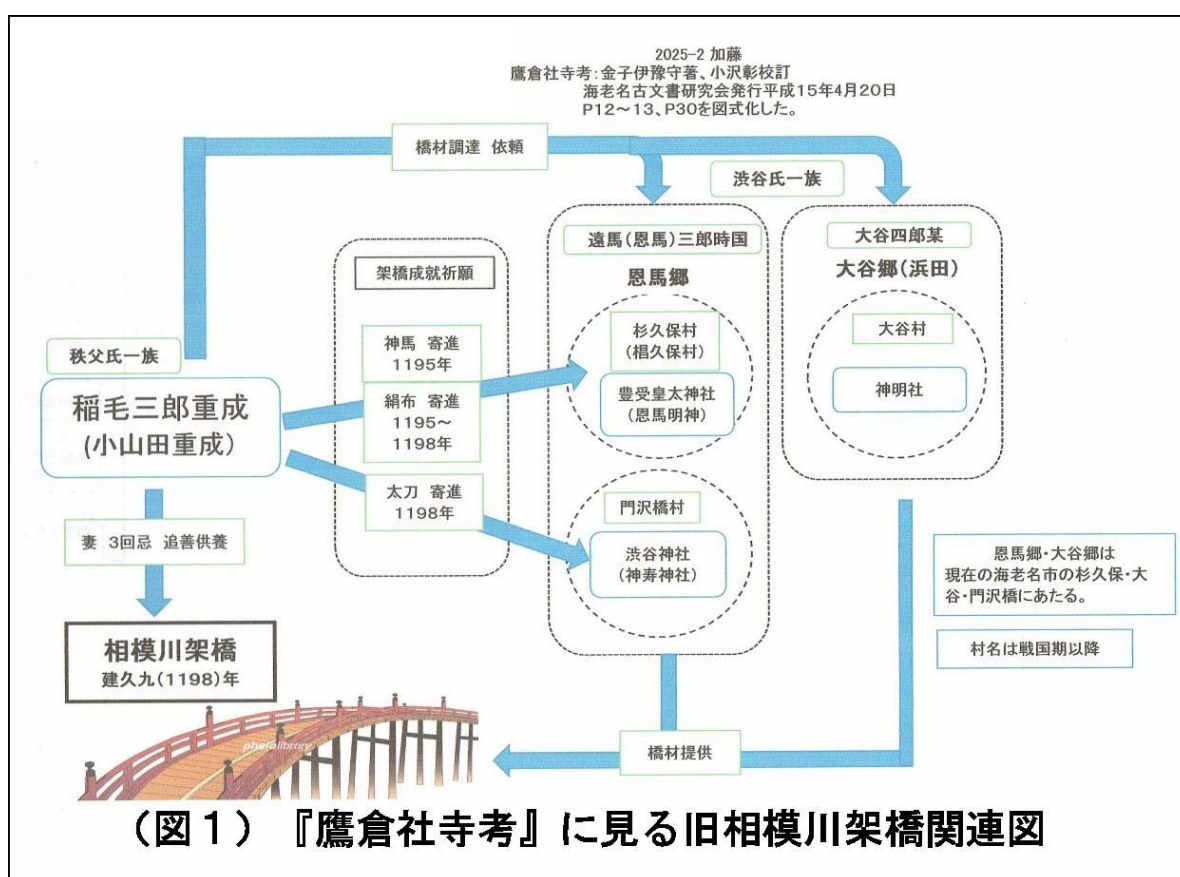
『海老名の地名』杉久保村の項に書かれた稲毛三郎の事跡は、『鷹倉社寺考』の相窪村豊受皇太神の項に書かれた内容と、門沢橋村加牟之由明神に書かれた内容を統合していることが分かります。いずれにしても『鷹倉社寺考』に書かれたことは口碑と思いますが旧相模川橋脚の橋材の出所の話として大変興味深いものです。稲毛重成の領地は現在の川崎の多摩区生田【榊形城】となっており、この地区から橋材の供給は可能であったと筆者は思っています。ただ橋材の搬送上、相模川やその支流を活用する前提で秩父一族の所領がある海老名一帯が選定されたように思えます。次に『鷹倉社寺考』に書かれている稲毛三郎と神社の関係をまとめ、関連図(図1)に示します。

『鷹倉社寺考』とは何か

稲毛重成の事跡等が書かれた『鷹倉社寺考』とはどのような書物か。『鷹倉社寺考』の巻頭言(はじめに)と巻末『鷹倉社寺考』への所見にまとめられていますので、この内容について概略を次に示します。

巻頭言より引用

『鷹倉社寺考』は寒川神社の神主金子伊豫守(かねこいよのかみ)によって書かれた。成立年代は江戸前期後半の万治二年(一六五九)頃で、それを何人かの人達により調査し、後に修正も加えられて江戸時代末頃まで引き継がれ編纂された。特徴として、海老名・寒川を中心に『新編相模国風土記稿』



に先立ち、各村の歴史や神社・寺院の詳細を載せ、正史は正史、稗史【はいし…民間の歴史や伝承】は稗史として書かれている。特に各村の神社の神主や社人【しゃにん・しゃじん…神社に仕える下級の神職】の名前が記載されている。それを海老名の郷土史家故小沢彰氏が永年かけて校訂し、『海老名市文化財資料集』第一集(*4)を皮切りに第七集まで発表されたが、小沢彰氏がご病気になり、原本転写の全部は発表されていない。発表された第一集から第七集を海老名古文書研究会が誤字脱字等を改め、一冊の本として平成十五年(二〇〇三)に発行された。

引用本に記載されている『鷹倉社寺考』への所見

(一)『鷹倉社寺考』の原本が現在はない。海老名市の故大島正憲氏所蔵の『鷹倉社寺考』を小沢彰氏がノートに転写したものがあるが、大島家の原本は今ない。

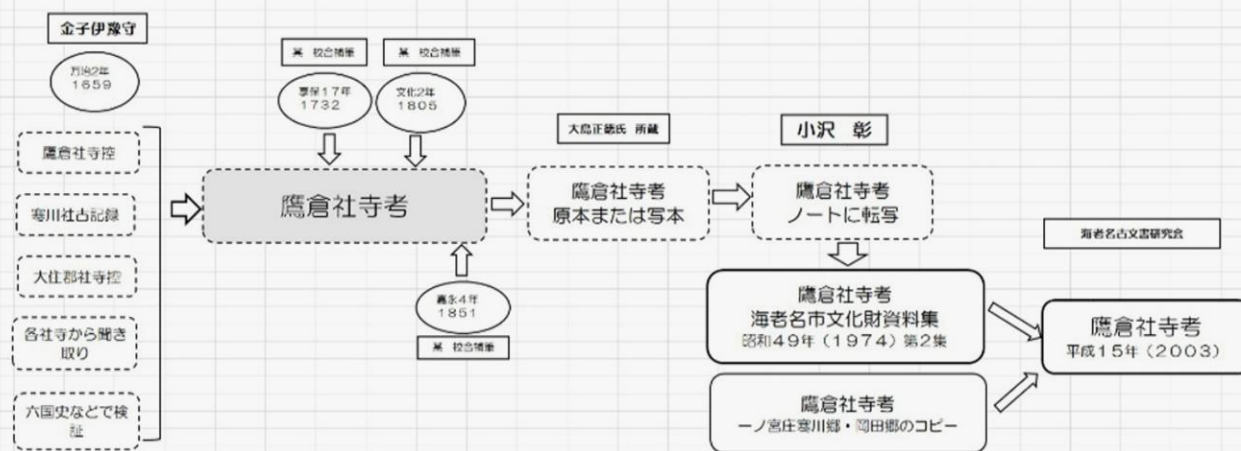
(二)海老名市の各村の神社や寺院の歴史が書かれているが一部地域(望地・柏ヶ谷)の記録はない。

(三)『鷹倉社寺考』が書かれる前に寒川明神の先師により「鷹倉社寺控」というものが既に作られていたらしい。他にも「古志」「寒川社古記録」があり、これらの資料をもとにつくられ、何回もの校訂や改訂、追加記入などを加えながら幕末まで書き継がれていたようである。

(四)作者の金子伊豫守の生没年は不明。寒川町宮山の西善寺には金子伊豫守の墓がある。金子伊豫守【伊豫守の官位は京都吉田神社の許状に依る】は、伊豫守を名乗る前、金子采女伝次郎と判断される。寒川神社に仕えた社家は三十三戸あり、その中

(図2) 『鷹倉社寺考』の編集過程図

『鷹倉社寺考』海老名市古文書研究会版p159～165より作成 —加藤—



の金子姓は十二戸、さらにその中の一戸が神主の金子家であった。神主金子家は代々世襲であり、明治初期まで続いた。『鷹倉社寺考』は代々の伊豫守をとつて作者を神主金子伊豫守としたのではないか。

(五)『鷹倉社寺考』
中の引用文献。足利史、武蔵志、寒川社古記録、三代実録、元亨釈書、続日本紀、続日本後紀、太政官符、日本史略、六国史、類聚三代各、扶桑略記、官衙野史、書玄故事、陸奥記、類聚国史、日本後紀、日本靈報長寿記、法華往生要記、三代志など。

(六)『鷹倉社寺考』の内容は歴史的価値がある。正史は正史として、稗史は稗史としてとらえている。あくま

で調査を主体におき、わからないところは包み隠さず述べている。中世からそれ以前の地方史が述べられているところが最も魅力的である。『鷹倉社寺考』は小沢氏個人の手により校訂されたもので、しかも原典が紛失しているということで基本資料には適さないという意見が多くある。しかし公に刊行された海老名市資料集の『鷹倉社寺考』を用いている人も少なからずいる。

【引用文献等】

*1『海老名の地名』海老名市史叢書7 平成十年三月二十八日
海老名市発行

*2 『鷹倉社寺考』 著者金子伊豫守、校訂者小沢彰、海老名市古文書研究会平成十五年四月二十日編集発行

*3 神社名の読み方についてははっきりしていないが海老名市の見解では「かむのいわれみょうじん」また「かむのよしみょうじん」との事だった。

*4 『海老名市文化財資料集』第一集 昭和四十八年海老名市教育委員会発行

いまの言葉で

『大岡越前守忠相日記』を読んでみた！＜＞

野田 穂

古文書と歴史の素人が『大岡越前守忠相日記』の現代語への意訳を試みるシリーズ第二回です。

今回は、前回の日記の二年前、実母栄樹院の父、北条氏重の菩提寺について、記載がある日の記録を読みました。

訳文中の（ ）は注記、*は補足・補注です。(筆者調べ)

寛保三(二七四)二年二月二十二日

(忠相六七歳)

朝、少し雪が降ったがすぐ止む。十時頃から晴れたり曇ったり

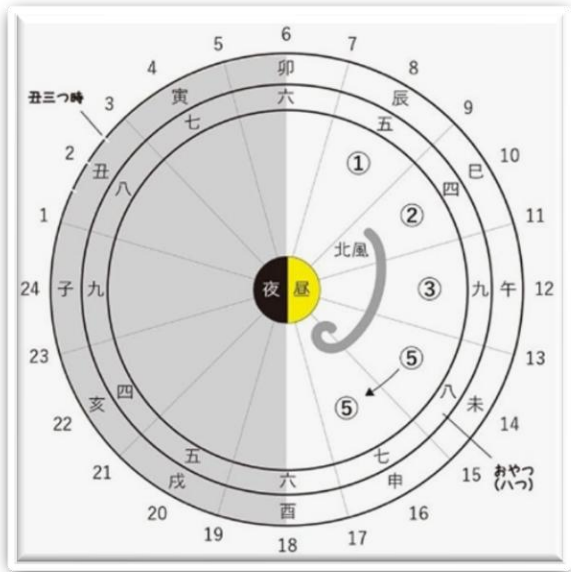
【出勤当番(寺社奉行として江戸城に)】

① 十時 出勤

② 中務殿(本多中務大輔忠良・老中 五四歳)に四人面会。南禅寺金地院*1と鎌倉五山・京都五山*2が統括する寺社のもめごとに関する伺い書一通。金地院へ、権現様(初代將軍・家康)以来代々の將軍が定めた例規集の写し一冊を因幡守(山名因幡守豊就とよなり・寺社奉行 五八歳 *3が上に提出した。

③ 中務殿に先日申し上げた、日光東照宮(初代將軍・家康墓所)と日光輪王山大猷院廟(三代將軍・家光墓所)の修復*4の計画について、大楽院(東照宮を管理する寺)と竜光院(大猷院を管理する寺・龍光院とも)から派遣されて、昨日、竜王院*5が御仏像と掛け軸などの御道具の修復願いを持参。また、大楽院からの帳面二冊(一袋)、竜光院からの帳面一冊(一袋)を、私たちの文書とともに上に提出した。

④ 一昨日遠江殿(加納遠江守久通・御側 七一歳 *6に伝えた、朱印状を提出した者達に渡した褒賞の銀貨の数*7について文蔵*8に確認した手紙一通と、一昨日文蔵に見せて戻ってきた事例書が一通。さて、文蔵に遠州見附宿(東海道二八番目の宿場町)の治大夫は知り合いの者か聞いたところ、今回初めて会った者とのこと。間違いはないと思われるが、治大夫は地元(見附宿)を出て当地(江戸)に來た者で間違いないか、何歳くらいなのか、妻子持ちなのか、管轄の代官に尋ねたいと思っている。よって、銀貨を渡す件はこの確認が済んでから申し上げたい。その内の、治



大夫が江戸へ奉公に出て働くことは、思う通りにしてよいと伝えたい旨、上へ報告。

⑤ 今月当番の相模守(堀田相模守正亮 まさすけ・寺社奉行 三二歳)

*9 が、天英院様 *10 の三回忌法要の担当で、明日二十三日から増上寺で法要が始まるので、明日から私と二人体制で当番とすることを中務殿(老中)に紀伊守(本多紀伊守正珍 まさよし・寺社奉行 三四歳)が届け出た。増上寺の法要が行われている間、伊豆守(松平伊豆守信祝 のぶとき・老中 六一歳)は御用があるので、中務殿が退出の際は *11 紀伊守に頼むと伝えた。

⑥ 中務殿(老中)が十三時に退勤したので、私も帰宅した。

⑦ 静岡県の山名郡北

原川村に最乗山上嶽寺

*12 という曹洞宗の

寺があり、実母栄樹院様の父、北条氏重の位牌と墓がここにある。

栄樹院様が御存命の時は年忌法要も行なっていたが、亡くなって以後は、誰も心付けもせずご無沙汰となり、これ以後は年忌法要も命日のお参り等も後々に

は断絶すると思われるので、この度、寺存立のための寄付金二十両(今のお金で三百万円強) *13を寄付の趣旨を記した文書を添えて、千葉県国府台の総寧寺 *14に頼んで、上嶽寺へ、この寄付金を書き記して残す。上嶽寺の位牌に記されている北条氏重の戒名は「長成院殿泉岩玄清大居士」。かつて五十回忌の法要 *15を行なった際、栄樹院様のご苦勞されて調子を悪くしたので、その時も私達から少々の金貨を渡して法要が無事済んだ。つまりところ、今回の寄付金も栄樹院様のためである。後年の覚書として、ここに記しておく。

【大岡日記 原文】(*中巻 二四頁)

詰番 廿二日 朝之内少雪降即時止、四時頃方晴曇

① 一 四時 登城

② 一 中務殿江四人懸御目、金地院と五山支配下之出入伺書一通、金地院江権現様已来御代と御条目之写一冊因幡守被上之候

③ 一 中務殿江先日申上候日光御宮御霊屋御修覆見分有之付而、大楽院竜光院方さし越昨日竜王院持参御仏像御道具御修覆願、大楽院さし出候帳面式冊一袋二入、竜光院さし出候帳面式冊袋二入、我等書付一通共二上候

④ 一 遠江殿江一昨日御申候御朱印差上候者共江被下銀員數之義文蔵相尋了簡書一通、一昨日御見せ候例書一通返進申候、扱見付治大夫義文

蔵存知之ものニ候哉と相尋候処、此度初而、逢候ものニ候由申候、尤相違成事ハ有之ましく候へ共、治大夫義所を罷出当御地江罷下候之ニ相違ハ無之哉、何歳斗之者ニて妻子等も有之ものニ候哉、支配之御代官尋置申度候、依之銀子被下候之ハ、右濟御左右申上度候、其内著治大夫奉公掾可申ハ勝手次第可仕由申聞置候旨申上候

⑤一 当月番相模守義天英院様三回御忌御法事御用付、増上寺江明廿三日方御法事初、明日方我等月番を助相勤候之段中務殿江紀伊守御届被申

一 筆致啓上候然者長成院殿為御菩提今度從越前守祠堂料被致寄附候付別紙書付毫通金式拾差進之候永々無怠慢御回向被頼入候右之段為可得御意如斯御座候恐惶謹言

大岡越前守内

(寛保三・一七四三)

酒井東 吾

二月廿二日

徳陳(花押)

加藤兵 作

政親(花押)

小林勘 蔵

重宣(花押)

山本左右太

政泰(花押)

上嶽寺悦聞和尚

大岡忠相寄付状／「袋井市史資料第六巻」P.104-105 上嶽寺文書から転記

上候、此節我等義伊豆守殿御用有之罷有、中務殿退出之節故紀伊守を頼申上候

⑥一 中務殿九半時前退出ニ付罷帰候

⑦ 遠州山名郡北原川村ニ、最乗山上嶽寺と申曹洞宗ニ而北条出羽守殿氏重之御寺有之、尤御位牌御廟所共ニ有之、栄樹院様御存生之内ハ御年季御法事等有之、栄樹院様御死去已後ハ誰も心付不申哉其沙汰も無之候得ハ、此已後とても御年季等御法事御忌日等之執行も後々ハ断絶可仕と存候ニ付、此度存立寄付金式拾両被寺江遺之寄付状相添、国府台総寧寺末寺付総寧寺を頼、右之寄付金上嶽寺江遺之候、右寺ニ有之御戒名者長成院殿泉右玄清大居士、右先年五十回御忌御法事之義も栄樹院様御苦勞被成難調候之処、我等方々其節も少之金子を上御法事相済候、畢竟此度寄付金納候も栄樹院様御菩提之御為と存候、後年之寛ニ爰ニ記置之

補足・補注

・西暦は元号に対応。日付は旧暦。年齢は数え年。

*1 南禅寺金地院：徳川家康に仕えた臨済宗南禅寺派の僧侶・金地院崇伝(以心崇伝)の居所。京都金地院は崇伝が再興した南禅寺の塔頭(たつちゅう)大寺院敷地内の小寺院の一つ。江戸金地院は、崇伝が創建し、元和五(寛永十六(一六一九)一六三九)年までは江戸城北の丸にあったが、以後は芝(現在は東京都港区芝公園二五四)に所在。金地院崇伝は「黒衣の宰相」や「寺大名」とも呼ばれた権力者。

*2 鎌倉五山・京都五山…五山は鎌倉時代に北条氏によって導入された禪宗寺院の格式。鎌倉幕府滅亡後、京都にも五山が導入された。鎌倉と京都の五つの寺で五山とされた時代もあるが、至徳三・元中二(一二八六)年に室町幕府三代將軍・足利義満が改定し現在の五山に。《鎌倉五山》建長寺・円覺寺・寿福寺・淨智寺・淨妙寺

《京都五山》天龍寺・相国寺・建仁寺・東福寺・萬寿寺。両五山の上の「別格」が南禅寺。

*3 山名因幡守豊就…八代將軍吉宗に重用され、大番頭を経て、元文四(一七三九)年から亡くなる延享四(一七四七)年まで寺社奉行。本来一萬石以上の譜代大名が任命される寺社奉行に抜擢されたのは、旗本から寺社奉行になった大岡忠相と同様に異例のこと。領内で一揆が起きた際に、百姓の要求を多く聞き入れて解決するなど、大岡忠相と経歴や性格が似ていたと想像される。

*4 この日記の翌年、延享元(一七四四)年九月六日に東照宮、大猷院廟、本坊の修復が終わり、御神体が仮殿から本殿に正遷宮された。

*5 どここの竜王院かは不明。

*6 遠江殿(加納遠江守久通)…吉宗の右腕・御側御用取次役。男女逆転版NHKドラマ「大奥」(二〇二三年)では貫地谷しほりさん演。

*7 当時幕府は、民間に多く出回っていた過去の徳川將軍文書(御朱印)の回収と焼却処分を行っていて、提出した者へ銀貨二一〇枚を褒賞として下していた。

*8 文蔵…青木文蔵。甘藷先生と呼ばれた青木昆陽のこと。忠相が南町奉行だった頃、町奉行所与力の加藤枝直又左衛門から推挙された。日記当時は、寺社奉行配下の御書物御用達として古文書の収

集・研究など紅葉山文庫の充実に携わっていた。治大夫は、困窮のため江戸奉公に出ようとしていたが、家の蔵に代々伝わってきた朱印状の置き場がなくなることになり、浪人の塚原新三郎を介し、青木文蔵、忠相の経路で朱印状が幕府に提出された。

*9 堀田相模守正亮…延享元(一七四四)年に従五位下から従四位下になり大坂城代(城主として江戸幕府から派遣された大名)、翌年老中に。寛延二(一七四九)年、老中トップになった。

*10 天英院…(近衛熙子このえひろこ)六代將軍・徳川家宣(在位三年間)の正室。八代將軍に吉宗を強く推したと言われている。寛保元(一七四二)年二月二十八日没(七四歳)。墓所は芝増上寺。

*11 本多中務大輔忠良(老中)は、六代將軍・家宣と七代將軍・家継のとき側近(御用人)で老中に次ぐ席次だったが、吉宗が將軍になった際、職を解かれて帝鑑間席詰めになり(二七歳)、十八年後に老中として国政の表舞台に復帰(四五歳)。日記中の退出の理由是不明。

*12 上嶽寺…静岡県袋井市に現存。大岡日記補注には「氏重の画像および寛保三年二月二十二日付の大岡越前の寄付状を保管する」とあるが、画像・寄付状の現在の所在は不明(袋井市教育委員会生涯学習課文化財担当係に確認)。内容は「袋井市史資料集 第六巻」に収録。

*13 米五キロ〇三三〇〇〇四〇〇〇円で換算。貨幣博物館／日本銀行博物館 <https://www.jmes.boj.or.jp/cm/history/edo/jidainotryowa/>

*14 総寧寺…千葉県市川市国府台に現存。江戸時代には曹洞宗寺院を統括する関三利(かんさんざつ)の一つに任ぜられ、末寺三千余寺を擁していたという。関三利の末寺に当たる江戸三箇寺の内、二つの寺の学寮が発展してできたのが今の駒澤大学。

*15 五十回忌の法要…宝永四(一七〇七)年頃に北条氏重の法要があったとすると、夫の忠高が元禄十四(一七〇二)年、忠相の実弟忠厚が宝永五(一七〇八)、忠相の最初の妻珠莊院もこの頃に亡くなったっており、気苦労が続いていた可能性もあるか。

【参考資料】

- 『大岡越前守忠相日記』上・中・下巻 大岡家文書刊行会編纂／三二書房 一九七二―一九七五年
- 『ちがさきと大岡越前守』茅ヶ崎市史ブックレット12／茅ヶ崎市史編集委員会 二〇一〇年
- 金地院／港区観光協会 <https://visit-minato-city.tokyo/ja-jp/places/770>
- 臨済宗五山派の金地院／港区デジタル版 港区のあゆみ：港区史通史編 近世(上) <https://adeac.jp/minato-city/texthtml/d110021/mp100010-110021/t001830>
- 鎌倉五山／鎌倉市観光協会 <https://www.trip-kanakura.com/article/hiking-modelcourse/kanakuragozan.html>
- 京都五山／刀剣ワールド <https://www.touken-world.jp/history/history-important-word/kyoto-gozan/>
- 村岡山名氏五代目・山名豊就／墓守たちが夢のあと(mintanaka65) <https://ameblo.jp/mintanaka65/entry-12572626704.html>
- 大猷院／わくわく！日光の社寺たんけん https://www.nikko-syaji-tanken.jp/futarasan_rimonoji/taiyuin/index.html
- 大猷院／日光山輪王寺 <https://www.rimonoji.or.jp/history/temple/taiyuin.html>
- 旧日光市歴史年表／日光市 <https://www.city.nikko.lg.jp/soshiki/10/1041/3/1/1515.html>
- 明治26年発行の尋常小学生徒用修身教科書より 第十四課 續密／ふるさと加東の歴史再発見 <https://blog.goo.ne.jp/hyaku-chan-fuji1888/e/177aaab871a80cbfec73d61b4f2e69da>
- 第3章 復興への努力と災害の記憶／内閣府防災情報 https://www.bousai.go.jp/kyoiku/kyokun/kyoukunokeishou/rep/1783_tenmei_asamayama_funka/pdf/1783-tenmei-asamayamaFUNKA_07_chap3.pdf
- おもな佐倉城主(藩主)と堀田家の人々／佐倉市 <https://www.city.sakura.lg.jp/soshiki/bunkaka/bunkazai/jinbutsu/5733.html>
- 徳川将軍家墓所／大本山増上寺 <https://www.zojoji.or.jp/keidai/tokugawagrave.html>
- 徳川将軍家の歴代御台所／大江戸歴史散歩を楽しむ云 <https://wako226.exblog.jp/241726926/>
- 曹洞宗 安國山總寧寺 <https://sonei-ji.jp>
- 『あるむぜお85』府中市郷土の森博物館だより 二〇〇八年
- 『袋井市史資料集 第六巻』上嶽寺文書 一九七九年
- 『徳川将軍文書の焼却にみる近世の文書認識』種村威史／国文学研究資料館紀要 アーカイブズ研究編 第5号(通巻第40号) 二〇〇九年
- 『江戸幕府と情報管理』大友一雄著・国文学研究資料館編／吉川弘文館 二〇二四年 四六―四九頁

浜降祭伝説と御旅所神主鈴木丹波

平野文明

はじめに

日本民俗学が対象とするジャンルの一つに「伝説」がある。これと似たものに「昔話」があるが、「昔話は誰からも信じられていないが、伝説はある程度まで信じられている」と説明されている。(*1)

茅ヶ崎で多くの人が知っている伝説の一つに「浜降祭起源伝説」がある。簡略に紹介すると次のようである。

浜降祭が始まったのは、南湖の漁師孫七が、相模川に流された寒川神社の神輿を漁の最中に拾い上げ、神社に知らせたことから、寒川社がお礼のために毎年南湖の浜まで渡御することになったことに依る。(*2)

巷間にはこの話に、神輿が流されることになった理由や、孫七へのお礼として寒川さんは大量の米を用意したとか(渡さずに済んだことになっているが)、神輿流出事件は江戸時代の天保の頃(一八三〇〜一八四三)の出来事だったとか、海から引揚げられたのは神輿ではなく御神霊だったなどという話が追加され、真実味を持つ一篇の物語となっている。

流された神輿が網にかかって引き上げられたという事がほんとうにあり得るのだろうかという疑問を持つ人も居ることだろうと筆者は思うが、実際に起こったことのように伝えられている現場を見ると、伝説は「ある程度まで信じられている」という、右の

説明は妥当なものと思える。伝説は文字に依らない「歴史」と言い換えることができる。

一方、浜降祭に関する記録(古文書)が残っている。こちらは文字に依る「歴史」である。

浜降祭に関し、文字に依らない歴史(伝説)と文字に依る歴史がある。令和七年七月十五日に行った「郷土会・丸ごとの会共催の学習会」で筆者が話した「民俗と歴史で見る浜降祭」の内容をもう一度ここで展開してみようと思う。

文書史料に見る浜降祭

寒川町史調査報告12『浜降祭日記』(*3)に収録されている圭室文雄著「浜降祭について」は、浜降祭研究中優れたものだと筆者は思っている。この論文の中に、安永九年(一七八〇)正月の日付を持つ「当社(寒川神社)年中祭附并神領石高帳」という史料中の六月十四日の記事(*4)は、文中に「浜降祭」の文字が無いにも関わらず、浜で行われた神事を記したものであることから、浜降祭記録の最古の史料と紹介されている。また『茅ヶ崎市史』1、『新編相模之国風土記稿』浜之郷村、『寒川神社日記』などから浜降祭の記録が集めてある。

ここで考察してみたいのは、圭室氏も取り上げている『茅ヶ崎市史』1(*5)に収録されている二点の浜降祭史料である。この

二点の史料、全文を活字化したものは同書で見ることができ、
で、ここでは読みやすいようにカタカナと一部の漢字を平仮名に
変え、句読点を増やし、西暦を加え次に掲げておく。改行も新た
に行ったものである。

その一 六一一頁掲載

一七〇号史料「寒川神社浜降御旅所願書」(天保十一年(一八四
〇)四月)

差上申一札之事

相州高座郡茅ヶ崎村小名南湖浜石尊山にこれある、当国一之宮寒
川神社浜下り御旅所、進退まかりあり候につき、神拝浄目式御伝
達下され置き難き仕合に存じ奉り候。然る上は、子孫永久継目仕
り、神つとめ相続すべく仕り候。
且つ御触書、御廻状取次は勿論、年始、八朔相勤むべく申し上げ
候。なおまた、装束、御免許は申すに及ばず、位階、昇進など願
い上げ奉り候節は、その御本殿へ御執奏願い上げ奉り候。其の為
一札差上申す処件の如し。

天保十一年 江川太郎左衛門御代官所

子四月日 相州高座郡茅ヶ崎村之内 字南湖

名主 喜兵衛

親類 清左衛門

御旅所神主 鈴木孫七

神祇官様

御触頭

軍荼利日向介様

史料を解釈すると次のようになる。

二行目にある「南湖の石尊山にある寒川神社の御旅所」の文中
の「石尊山」とは、南湖中町の八雲神社(南湖四一四―二九)の
ある低い高台を指し、同所は寒川神社の浜下りの「御旅所」とあ
る。御旅所とは浜降祭の祭場の事で、実際は南湖の浜辺だが、石
尊山のすぐ近くに御旅所神主の鈴木孫七の屋敷があり、伝説で
は、孫七は引き揚げた神輿をまずここに祭ったという話もある
(*6)。続けて「御旅所、進退まかりあり」とある。「御旅所神主
の進退に問題がある」という意味で、その結果「神拝浄目式御伝
達下され置き難き仕合」(神拝浄目式Ⅱ浜降祭は実行され難くな
った)ということである。

ここで問題が一つ生じる。「進退まかりある」御旅所神主は誰
を指しているかということである。

考えられる一つは、従前から神主を担当していた家があつてそ
の家の「進退」(相続)に問題があつてという解釈。もう一つは
以前から鈴木家が神主を勤めていたが、問題があつて御旅所神主
を続けられなくなったという解釈。

前者の場合は鈴木家が代わって神主役を引き継ぐということ、
後者では鈴木家は何らかの方策を講じて引き継ぐということにな
る。どちらにしても、鈴木家は何らかの方策が必要となる。その
方策とはどのようなことか。史料の文面では「子孫も永久に御旅
所神主を継ぎ、神事を続けられるように神主装束や神主の免許を
頂きたく、また神主の位階や昇進などについても「御本殿」へ取
り次いでほしいと頼んでいる。

依頼先は「神祇官様／御触頭（おふれがしら）／軍荼利日向介（ぐんだりひゆうがのすけ）様」とある。「神祇官」とは、この史料が作られた天保のころだと、吉田家と並んで、全国の神主をまとめ、その許認可を行っていた京都の白川伯王家のことで、白川家の「御触頭」である「軍荼利日向介」に向けて差し出されている。

出した方は、南湖の名主の喜兵衛を筆頭とし、「御旅所神主鈴木孫七」とその親類の精左衛門である。名主喜兵衛が名を連ねているのは、浜降祭の存続は南湖全体が関わる問題だったからであろう。

天保十一年段階、鈴木孫七は神主に必要とされる「装束、御免許」を持っていなかった。神主の資格が必要になり、軍荼利日向介を仲介にして神祇官の白川伯王家に入門する必要が生じた。それがこの年であったのは、江戸時代末期の社会事情によると筆者は考えるが、ここでは踏み入らないことにしたい。

「白川家の御触頭、軍荼利日向介」とは何者なのだろうか。

「軍荼利日向介」は『新編相模之国風土記稿』（※7 以下『風土記稿』と記す）、佐野川村岩楯尾神社（いわたておんじや。相模原市緑区佐野川三四八）の項に、「神主軍荼利日向介」と記されている。

『風土記稿』に、同社は延喜式内社相模一三座の一つで、蚕山にあり、神体の石楯は破壊して、あるのは小祠、下岩（集落の名カ―筆者）の鎮守とある。また、蚕山の社は前社で、本宮奥の宮は三国峠の頂きにあるとも記されている。

岩楯尾神社はこの社以外に相模原市内には緑区名倉四五二四と南区磯部二一三七にもあり、現在は名倉の社が式内社を唱えているようである。

『風土記稿』三五九頁には

神職軍荼利日向介多基成 京都吉田家の配隸、佐野川村の岩楯尾神社（式内社）の神主で、天保六年（一八三五）四月神祇伯家（白川伯王家）の許状を賜る

とある。基成は、神社に古記録が残っていないからと、神武天皇に繋がる神主由緒書を造り、その文末に「神主 軍荼利日向介多基成」と記している。『風土記稿』の記事から、基成は吉田神道に繋がっていたが、理由は不明だが天保六年に白川伯王家筋に移っていることが分かる。

軍荼利日向介は佐野川村の岩楯尾神社神主で、軍荼利日向介の官名を有し、律令時代の神祇官の流れを汲む京都の白川伯王家の「御触頭（おふれがしら）」であった。しかし、史料一七〇号にある「軍荼利日向介」は多基成であるかは分からない。このことについては、別に考えてみたいと思っている。

先に紹介した圭室文雄氏は『浜降祭日記』六頁で、一七〇号史料について「鈴木孫七がこの時に寒川神社御旅所の神主になっていることも分かる」と解説しているが、孫七はまだ御旅所神主にはなっていないのである。

その二 同頁掲載

一七二号史料「寒川神社末社神官任命につき願書」（天保十一年（一八四〇）十一月日）

恐ながら書付をもつて願上奉り候

相州高座郡茅ヶ崎村字南湖浜ニこれある、一之宮寒川神社御旅所神主家、年来衰廢にて継目つかまつらずまかり過ぎ候所、**右村初五郎**義由緒これあり候に付、右神主家相続つかまつり候。これに依り今般御殿御官門に召し加えられ、風折烏帽子・浄衣・差(指貫(袴の一種)御免成し下し置かれ、鈴木丹波守と改名の御許し状頂戴仕りたく、此の段願上候、もつとも此の願に付、出方よりも故障等御座なく候、もしまた自然何等之儀出来候共、加判人引受、お役所え御苦勞(掛け間敷き義掛け間敷く—文章の乱れあり)奉り候間、願いの通り仰せ付けられ下し置かれ候様、一同偏によりしく願上奉り候、以上

天保十一子年十一月日

江川太郎左衛門御代官所

相州高座郡茅ヶ崎村

字南湖

名主 喜兵衛

組頭 久兵衛

親類 彦八

右神主伴添

鈴木孫七

白川御殿

御役所

内容は、

寒川神社の御旅所神主家が衰廢して、後を継ぐ者がいなかったのだが、南湖の初五郎が神主家を継ぐことになりました。白川伯王家の一門に加えて頂き、風折烏帽子等の神主装束の着用と、鈴木丹波と改名のお許し状を頂戴いたしたくお願い

申し上げます。このことについてどこからも苦情はありませんし、もし何事かが出来しましても加判人が引き受けて、白川神祇官へは迷惑を掛けませんので、願いをお聞き届けられますよう一同よりお願い申し上げます。

という文面で、一七〇号史料で述べた御旅所神主の、鈴木家への引継ぎが完了したので、白川家の門人に加えて頂き、神主装束一揃いと鈴木丹波という官名への改名をお願いするという願書である。

一七〇号史料で取り上げた「進退罷りある」家はどこかという問題は、家の名は分からないが鈴木家の前に神主を勤めていた家ということがはっきりした。

「初五郎」という名が見えるが、「孫七」は鈴木家代々の通し名で、「初五郎」は当時の当主の名前なのであろう。つまり、これから入門の手續を始める訳で、鈴木家は神主にはなっていないのである。

南湖鈴木家の白川伯王家入門

『白川家門人帳』(※8)という史料がある。

国立国会図書館サーチで、

白川家に伝わった「諸国門人帳」(四冊)と、古帳の写「諸国門人帳」、ならびに「諸国御門人帳」(二冊)の翻刻

という書誌データが出る。筆者はこの図書の部分的なコピーしか持っていないが、同書一九〇頁に、鈴木丹波の入門の記述がある。

同(相州)高座郡茅ヶ崎村字南湖 一之宮御旅所神主

天保十二年丑年正月願 鈴木丹波

という簡単な記述だが、入門願いは天保十二年(一八四一)の正月に出されていることが分かる。白川家からはこの後に入門の許可証と思われるものが発行されている。『南湖郷土誌』一八一頁にはその文書を次のように紹介している。

鈴木家には御旅所神主に任命された時の古文書が数点伝わっている。その一つ『付属状』には次のようにかいてある。

願に任せ身浄目式伝達せしむの上は、神事祭礼の日、其の身浄目旅所出入りせらるべく、よつて執啓如件／白川神祇伯王殿／岩村觸頭／天保十二年丑年正月／相州高座郡茅ヶ崎村南湖／鈴木孫七殿

同月内に授受されているのは触頭軍荼利日向介を介した準備の上で行われたからであろう。発行者が「岩村觸頭」となっているのは「岩村」は佐野川村内の地名で、軍荼利日向介のこと、またこの文書が『付属状』と題されているのは神主装束などに付けて下されたからだと考えられないだろうか。

なお『白川家門人帳』には、鈴木丹波以外に現在の茅ヶ崎市内から入門者が四人記されている。一七七頁に①茅ヶ崎村之石井長四郎(御門下の列／中臣祓授與／御禮金百足／申次 津國屋右兵衛) 天保十四年(一八四三)二月二十六日、一九二頁に②平太夫新田佐塚明神鑰取平井備後 天保十二年(一八四一)正月、五六三頁に③濱ノ郷村鶴嶺八幡宮神主石坂主税(神拝式／お礼金貳百足 明治元年(一八六八)／申次 古川三郎)、同頁に④赤羽根村神明宮神主杉崎藏人(神拝式、礼金は前同カ―筆者)。

この四人の記録から、白川家から入門許状と神主衣装の授与、改名許可、神拝式作法の伝授があったこと、及び入門者からは礼金が白川家へ支払われたことがわかる。

浜降祭起源伝説と文献史料

一七〇号・一七一号史料には、孫七が神輿を引き揚げたということは書かれていない。伝説が述べている事と全く違っている。これをどのように考えたらいいのだろうか。本稿を閉じるにあたって簡単にまとめておく。

一、鈴木家が浜降祭の御旅所神主の許状を白川伯王家から下されたのは天保十二年であり、伝説の神輿流出事件も天保の頃となっている。伝説は鈴木家が白川家に入門し御旅所神主になった年に合わせて語られている。

二、鈴木家が浜降祭に関与する前に別の御旅所神主家があった。神輿流出事件はなかったことになる。平塚市に伝わる丁髷塚の話などは、伝説が自らもつともらしい話へと成長することを確認するものである。

三、伝説の、孫七が神輿を拾い上げたというストーリーは根も葉もない話ではなく、全国の水辺に多く伝わる漂着神信仰の一つの形態である。時代を超えて伝わる信仰が芯にあるから、白川家の許状を得たというような歴史的事項を取り込んで、伝説は成長し、語り継がれていく。

【引用文献】

- *1 『日本民俗事典』「伝説」 大塚民俗学芸編弘文堂昭和四七年刊 四八〇頁
- *2 『茅ヶ崎市史』5 概説編 一一〇頁。
- *3 寒川町史調査報告12 『浜降祭日記』五頁 平成一四年寒川町刊寒川町刊

*4 03の五頁

*5 『茅ヶ崎市史』1資料編上 昭和五二年茅ヶ崎市刊

*6 資料館叢書11 『南湖郷土誌』一八二頁 平成七年茅ヶ崎市教育委員会刊

*7 大日本地誌大系二三『新編相模之国風土記稿』第五卷三五

五頁 昭和四七年雄山閣刊

*8 近藤喜博編『白川家門人帳』白川家門人帳刊行会 昭和四七年刊

(二〇二五年八月十五日記)

『茅ヶ崎市史』四卷(通史編)を読んでいます

平松和弘

『茅ヶ崎市史』四(通史編)の輪読会を「茅ヶ崎郷土会」と「ちがさき丸」とふるさと発見博物館の会(まるごと博物館の会)がコラボして二〇二四年八月二十日から始めました。

私は丸ごと博物館の会に入会してから、早や十年になります。茅ヶ崎市内の都市資源を多くの方に紹介する事業を展開してきましたが、郷土会にも入会して、色々勉強してきました。

両方の会の古参の方々も常々感じておられたようで、我々の茅ヶ崎に関する知識は、茅ヶ崎市史由来ではないか、まず、茅ヶ崎市史を読んでいくことから勉強してみようじゃないか、ということとが輪読会開始の発端でした。

そして茅ヶ崎の歴史を学ぶには、『茅ヶ崎市史』四(通史編)の輪読が適当となり、その一回目から手分けして読み進み始めました。この通史編は昭和五十六年三月に刊行されていますので、その後の研究の進展等で現在では異なる見解になっている箇所があることは推測していました。

通史編は、先史時代から現代の茅ヶ崎市に至る概説で、地形編

から始まり、考古編、古代・中世編(後北条氏滅亡の天正十八年…一五九〇まで)、近世編(江戸幕府崩壊の慶応四年…一八六八まで)、近現代編(昭和二十二年…一九四七の茅ヶ崎市発足まで。昭和三十年…一九四五の小出村合併についても含む)に区分されています。

市史輪読会の発足以来一年を経過し、一三回目の八月五日、古代・中世編に入りました。地形と考古編は取っつきにくいテーマが続いていましたが、やつと我々が知っている時代に入り想像を巡らせる機会がぐんと広がりはじめました。

八月五日は、古代・中世編第一章「古代の茅ヶ崎」の「概観」と第一節「茅ヶ崎のあけぼの」の項を読みました。数行ずつ読んで、参加者から活発な意見が出て、知的興味はあふれ、新しい情報提供もあり、楽しかったです。

輪読会は毎月第一火曜日十三時半から、主に図書館二会議室で、一〇名位で進めています。まだまだ参加できます。

上記した会の趣旨をご理解いただいた方ならどなたでも入会できます。興味のある方、一度のぞいてみてください。大歓迎です。

風

自由投稿欄

オリヅルの願い

— 佐々木禎子さんの三姉妹オリヅル —

広島市の「広島平和記念公園」にある「原爆の子の像」のモデルの佐々木禎子さんが折ったオリヅルが、ご遺族から茅ヶ崎市に寄贈されていることをご存知ですか？ 禎子さんと折鶴の話をご存知でしょうか。

禎子さんと折鶴の話を、私は恥ずかしながらホノルルで初めて知りました。二〇一四年、茅ヶ崎市がホノルル市郡と姉妹都市になろうとしていた時のことです。市議会議員も私費でホノルル市議会へ表敬訪問をしようとなりハワイへ。それなら、文化交流の端緒を探そうと、私は自由時間を使って、Japanese Culture Centre of Hawaii(日系人による日本文化センター)を訪ね、理事長のハヤシノさんにお目にかかりました。

「茅ヶ崎市の市民による文化活動団体に所属していて、ホノルルの方々と文化交流や平和啓発について交流を持ちたいと考えています」とお話ししたところ、ハワイには日系人が多いこともあ

り、伝統的な華道、茶道、書道をはじめ、空手なども盛んに行われており、和太鼓の演奏も人気があるなどの情報をいただきました。これが後に茅ヶ崎市民文化祭への書道、俳句、短歌などのハワイからの出展につながるのですが、それはさておき…

なぜ、平和啓発についてもお聞きしたかといえば、茅ヶ崎市文化団体協議会は、茅ヶ崎市の平和啓発活動を市と協働で行なってきた「平和を考える茅ヶ崎市民の会実行委員会」に委員を選出しているからです。さらに、ホノルルには日米開戦の地となつてしまった真珠湾もあるからです。

「平和ということなら…」と、ハヤシノ理事長が出してくださったのが、真珠湾ビクターセンターへ寄贈された「サダコのオリヅル」と、その常設展示についての資料でした。二〇一二年、佐々木家から、サダコのオリヅルが寄贈をされ、日本文化センタ

長谷川由美

佐々木禎子さんが作ったオリヅル2羽



の功績により、ハワイにおける日系人の地位は高く、退役された方々は尊敬される存在となったそうです。
「サダコのオリヅル」の展示がある真珠湾は、ご存知のとおり

ーを初め、多くの日系人の寄付などによって、常設の展示設備が整えられたのでした。

ハワイには、最多時二万人の日系人が移住し生活しており、中でも広島県、福島県の方が多かったとのこと。移った日本人が家族をもち、日系二世が成人した頃に、第二次世界大戦は起こりました。想像してみてください。両親の国である日本、自分のルーツである日本が、自分が育った国、米国などと戦争を始めたのです。日系二世の青年たちの中から、米国に忠誠を誓って米国の軍隊に入り、日系人部隊が編成されました。ヨーロッパ戦線で、誰よりも勇敢に戦ったことで知られています。そこで

日本が攻撃をした場所です。戦艦アリゾナは、海底に沈み、今でも燃料だったオイルがプカリ、プカリ、水面に浮いてきます。

平和の象徴として、全世界で知られるサダコのオリヅル。そのオリヅルにかける平和への願いは、二歳で被爆し、一二歳で白血病を発症し死亡した佐々木禎子さんが、病床の中で、痛みや苦しみと闘いながら、家族を思い、元気になることを願って折った千六百とも、それ以上とも言われる折り鶴から始まりました。禎子さんの没後、同級生によって全国へ募金が呼びかけられ、「原爆の子の像」が建立されました。

そして、二〇〇〇年代になり、遺族や原爆資料館に残された数十と言われる禎子のオリヅルが、思いやりと平和の象徴として全世界に寄贈されたのです。

そのうちの一羽が真珠湾ビクターセンターに、一羽が真珠湾にある戦艦ミズーリ記念館に、一羽が茅ヶ崎市役所に展示されています。真珠湾ビクターセンターのオリヅル展示の横には、海底に保存されている戦艦アリゾナの様子のライブ映像が映し出されています。

日本の攻撃で沈んだ戦艦アリゾナ、原爆が原因で亡くなった禎子さん、戦争の終結を見守った戦艦ミズーリ、その戦艦ミズーリにも平和への願いを込めた「禎子のオリヅル」があるのです。

茅ヶ崎市とホノルル市郡の姉妹都市友好協定書には、「平和」の文字があります。この三羽の鶴は、仲の良い姉妹鶴として、平和への願いを伝え、私たちがその願いを実現していくことを見守っていることと思います。

ロンドンのトトロ

二〇二五年六月十四日、ロンドンで「となりのトトロ」の舞台を見に行きました。

一九八八年の「Studio Ghibli (スタジオジブリ)」の映画は英国ではディズニーの映画並みに大変人気で、テレビによく出ます「Ghibli Week (ジブリウィーク)」といって、ジブリの映画ばかりを一週間の間、毎日、昼に一作ずつ上映する週があります。その時、トトロはもちろん放送されます。

そのようなことで、ロンドンで二〇二二年十月に「Neighbour Totoro (となりのトトロ)」の舞台が Barbican (バービカン) で始まるに際し、同年の五月十九日に発売されたトトロの舞台のチケットは、バービカンで、一日で最も多く売れたチケットになりました。それまでは二〇一五年に行われたベネディクト・カンバーバッチ主演のシェイクスピアの舞台、ハムレットが一日で一番多く売れた切符でした。英語の作家では世界一と称されて四百年の歴史を持つシェイクスピア劇の一日の販売チケット数を、トトロが追い抜いたとは非常に驚きのニュースでした。

トトロの舞台はバービカンで二〇二二年十月十八日から翌年一月二十一日まで続き、二〇二三年十一月二十一日から二〇二四年三月二十三日まで同劇場で再演されました。

「となりのトトロ」の三回目の舞台は、二〇二五年にはロンドンのウエストエンドにある劇場、Gillian Lynne Theatre (ジリアン・リン・シアター) でデビューしました。上演は三月八日か

川村 恵 (在 ロンドン)

ら三四週間ですが、六月十四日の舞台を見るために妹は一年前に切符を購入しました。そして当日、夕方七時からの舞台のために六時頃にシアターに到着すると、劇場の前にいる人たちが看板を見て喜んで写真を撮っていました。

英国には「お祭り」はありませんから、私たちは日本の各地に昔から受け継がれているにぎやかなお祭りに憧れています。私たちが入場した日、ジリアン・リン・シアターの中はすっかりお祭り騒ぎでした。屋内のショップでトトログッズを喜んで買っている人が多く、妹と席に座ると、両隣の観客二組は、興奮のあまりに座るなり私たちに話しかけて来ました。右側のカップルは英語

の舞台に日本語が混じると言い、「私達も少し日本語を勉強しました!」とのこと。左側のスイスカラの親子は「Totoro is so cute! (トトロはとてもかわいい!)」と、「大好きだから日本に行つて Ghibli Park (ジブリパーク) にも行きた





い。トトロと共に主役の MEI (メイ) と名付けた家族の一員もいます」と言っていました。

舞台が始まり、映画で見たトトロのお話を、ほぼそのまま英語で(歌は日本語のオリジナルで、そして白いトトロと荷物持ちの青いトトロが登場すると皆が大喜びで笑って拍手。キャラクターのかわいらしさと、日本の自然豊かな場所を再現して進むストーリーがこんなに愛されているのがとても嬉しいです。

左側の親子のお母さまは、舞台の後、感激で泣いてらっしゃいました。

舞台を見に行った後、何力所かの本屋さんでトトロの本を探しましたが見つかりませんでした。映画の方が人気なのだそうです。

我が家にはトトロにそっくりの猫がいます。その猫を見て、今もトトロの舞台を思い出して楽しんでます。

ロンドンでは現在もトトロの舞台がたいへん注目を浴びています。ハリウッドではアカデミー賞が有名ですが、英国の演劇界ではローレンス・オリビエ賞が最上級の光栄です。二〇二二年

Barbican (バービカン) でデビューした「となりのトトロ」は、翌年の四月、この賞を六部門で受賞しました。

そのような状況がロンドンのトトロに関して続いていますので、私たちはジリアン・リン・シアターで行われているトトロの舞台を六月十四日に見に行ったのです。嬉しい騒ぎでした。

(補注)

バービカン (Barbican) ロンドン東部シティと呼ばれる金融街の真ん中に位置する、一六ヘクタールにも及ぶ一大商業・居住・文化複合街区。

ウエストエンド ロンドン中心部の一地区の通称。ロンドンを代表する繁華街がある。

ジリアン・リン・シアター (旧ニュー・ロンドン・シアター) ロンドンにある名門劇場。内部は二層にわかれており、九六〇名を収容できる。

ロンドンでの「となりのトトロ」上演

<https://spice.eplus.jp/articles/328277>



グラン・カナリア島訪問記



皆様、カナリア諸島のグラン・カナリア島をご存知でしょうか？
行った事があります！と即答もありがとうございます。

大西洋に浮かぶカナリア諸島の一つでスペインに属し、スペインから約1000キロ、モロッコから約100キロのアフリカ寄りに位置します。

この常春の島に一九九四年に初めて行ってから、ずっと、「こんなブルーのグラデーションがあるのかしら」と驚かされる海、夕陽が沈む時の赤やピンク、オレンジ色の変化に我を忘れ、すっかり魅了され、この三十年間、何度行ったことでしょうか。今年も七月十三日から二十日まで行ってきました。



川村美子（在 ロンドン）

島の人々とヨーロッパなどからのホリデー客が共存しながら、皆フレンドリーで仲良く居心地よく、過ごせます。

いくつもビーチがあり、日光浴と気が向いたら泳ぎ、健康的で、物価も安く、優しく明るい地元の人々に癒されます。

島に初めて行って食事した夜、グラン・カナリア島在住の日本人の沖邦博さんと出会い、それから行くたびにご家族、友人、知人、仕事仲間を紹介され、輪が拡がり、私の家族なども順番に来て馴染み、世界中の人と知り合いになれて幸せいっぱいになりロンドンに帰ります。

沖さんは、約五十年前から在住し、当初は、遠洋漁業で栄えたラスパルマスで働き、やがて島の南部でレストランを営み、島民から慕われる存在となりました。今は八四歳で、エネルギーに、ご自分の果樹園でマンゴー、パイナップルなどを育てています。ほっぺたが落ちるほどジューシーで甘く美味しいです。いつも、

パルマスは、大航海時代にコロンブスらも中継地点として停泊し、近年では遠洋漁業の拠点となっていました。皆様、三船敏



グランカナリア島
アルギネギンビーチ

空を仰ぎ「神様ありがとうございませう」と言って水撒きなどなさるそうです。

カナリア諸島周辺は、昔からマグロ、カツオ、エビ、タコ、イカなどや貝類も獲れます。パエリアをワイワイガヤガヤと食すると、スペイン人の気分です。お皿に取り分けて下さる時もちよつとしたパーフォーマンスで大きなエビがアクセントです。

カナリア諸島の州都の一つ、ラス

郎さん主演の映画「怒涛一万里」をご存知でしょうか？あの港です。

また、世界でも美しいビーチに選ばれているラスカンテラス・ビーチのそばには、ステキなカフェがあり、有名なアーティストの絵のポスターを観ながらお茶を飲み、至福の時を過ごせました。

なんと、そこに、本当のアーティスト登場でびっくり!! 快くサインと握手をしてくださったのは、九二歳の PEPE DAMASO 氏。地元の人に、空港に彼の作品があると聞き、離陸する前にしっかりと拝見しました。

今回も様々な素敵な出会いがあり、発見があり、帰宅してもまたすぐ行きたくなりました。ふと茅ヶ崎や、茅ヶ崎の皆様とどこか似てると思ひながら、また茅ヶ崎にも行きたくなりました。私には、いくつも愛する心の故郷があり感謝します。



空港で見た作品

短歌七首

遠き日

藤間克子

柏餅手作りをせし遠き日の祖母を想いぬ一人食み
つ

ホタルブクロの花いちように下を向き夕影の中祈る
がごとし

遠き日の農の暮らしをしつかりと支えし祖母の節く
れだった手

八・六(八月六日)の新聞「原爆の恐ろしさ」「失われし
命への祈り」にうずまる

雨上がりの庭の草生くさふを緑美はしき小蛙跳ねし遠き日
もどらず

八十年経たちしも浴びし放射線ゆえの病に苦しむ
人等

紫陽花の夜目に白じら然しいて妖しき氣配のさ庭
の真闇

新暦短歌会々員

茅ヶ崎郷土会の事業報告

第三三三回 史跡・文化財めぐり報告

茅ヶ崎市内の東海道を歩く(その4)

今宿から中島をめぐる

平野文明

日時 令和七年六月十四日(土) 参加者…一五名

はじめに

茅ヶ崎市内には江戸と各地を結んだ主要道路が三本通っている。大山道と鎌倉街道と東海道です。東海道は古い道ですが慶長六年(一六〇一)に徳川家康が宿駅伝馬制度を整えて天下の大道となりました。市内の東海道は藤沢宿と平塚宿の間にあって、旅人が休憩する「ぼたもち立場」と「南湖立場」が設けられていました。この天下の街道、最近では歩きとおす人が多いようです。集団で西に向かう人たちを見かけることがあります。

茅ヶ崎郷土会でも過去に何回か市内の東海道探訪をめぐりましたが、昨年度から四回に分けて史跡・文化財めぐりを行いました。ここに報告するのは、その最後の今宿と中島(江戸時代は今宿村、中島村)です。

実施した六月十四日は雨の予報が出ていましたが、午前中は降りそうになかったので出発したところ、やがて小雨がぱらつき、中島の途中で切り上げる災難に見舞われました。このことから予定したコースの半分しか回れませんでした。また、現地で配布した見学箇所の説明書のコースの順番と、実施日に回った順番が違いましたが、この報告では実際に歩いた順に記しました。

今回の見学の目玉は、市指定重要文化財の木造日蓮上人坐像が祭られている信隆寺さんと上国寺さんで、そのお像を拝ませてくださいました。

いつものように朝八時五十分までに駅改札前に集まり、駅北口九時発の平塚駅行きバスに乗車、バス停「今宿」で下車し、帰りは「新田入口」で乗車し、茅ヶ崎駅に帰着しました。

① 妙厳山信隆寺 日蓮宗 今宿八三七

信隆寺は『新編相模之国風土記稿』(*01) 今宿村に次のように記されています。以下『風土記稿』と略記します。読みやすくするため文章に手を加えたところがあります。

妙厳山と号す。法華宗、下総国、中山法華寺(正中山法華寺)末。開山を伝えず。開基は甲州武田家の支族信就(のぶなり)、先祖の菩提の為に造立する所と云ふ(事は鰐口の銘に見ゆ。下に出す寺伝に、信就眼を患いて明を失ひ、薙染(ちぜん)＝

得度)して信隆院日閑法卿と号す。明暦二年(一六五六)八月廿五日寂すと云ふ。【諸家系図纂】を按ずるに、武田陸奥守信虎の弟勝沼安芸守信友が長男、丹後守信原が子を武田日閑と掲げ、信就盲人、元法華宗、信隆院と見ゆ。

三宝祖師を本尊とす。

七面堂 堂前鰐口を掛く。寛永元年(一六二四)五月の文を刻す(奉建立相州高座郡今宿村 妙嚴山信隆寺 厥(その)志者(こころざしは)、為先祖菩提也 大願主当寺開基大檀那也、従多田満仲四代武田新羅三郎義光公十六代の後胤源法印信就公信隆院日閑法印敬白)

『風土記稿』には「開山を伝えず」とありますが、信隆寺のサイトには「開山上人として正中山法華寺(千葉県市川市)より善立院日意上人を招いて創立されました」とあります。

また『風土記稿』に、開基は甲州武田氏の一族の信就(のぶなり)とあり、信隆寺創立のことは、寺に所蔵されている鰐口の銘に依るとしてその銘文を引いています。さらに「諸家系図纂」を引き、信就は武田信虎(信玄の父)の弟勝沼信友の長男、信原の子で、日閑と号し、盲人で、法華宗信者、院号は「信隆院」と唱えたとあります。信隆寺の寺号は信就の院号から付けられていることが分かります。

信隆寺創立のいきさつが刻されている鰐口について、『風土記稿』は「寛永元年」の銘があり、信就(日閑)は多田満仲(源満仲)清和源氏の祖とされているから四代、新羅三郎義光(源頼義)の三男で甲斐源氏の初代から十六代で、先祖を供養するために信隆寺を建てた」と記しています。信隆寺のサイトには鰐口の紀年銘「寛永元年」が寺創立の時としてあります。

私たちはこの鰐口を近くで拝見させて頂きました。直径三八センチ(*02)、たいへん大きく見え、銘文もはつきりしていました。七面堂に掛かっていたが、平塚空襲の時一部破損したと伝えられています。重要な文化財と言えます。



木造日蓮坐像(市指定重要文化財)は本堂に祭られています。私たちが訪問した時刻に、本堂では法要が行われていて、拝観することはできませんでした。

市内には日蓮宗系の寺院が神奈川県宗教法人名簿に一二ヶ寺あり、その中で室町時代在銘の日蓮像が、今宿の当寺と上国寺、萩園の常願寺に祭られています。信隆寺の像には永禄七年(一五六四)、上国寺の像には永正十一年(一五二四)、常願寺の像には大永七年(一五二七)の銘があり、以上三体とも市重要文化財に指定されています。これらの像の画像とデータは『茅ヶ崎市史』3(考古資料・仏像・民俗編)に収録されていて、信隆寺の像は次のように紹介されています。(*03)



信隆寺の開基 信隆院日閑(信就)の供養塔

木造日蓮座像 像高二尺。寄木造、玉眼嵌入。色彩は後補。日蓮の猪首の特色は強くあらわれているが、かなり人形化した表現をもっている。像の胎内背面に墨書銘がある。「八月十三日／法主日□坊／南無妙法蓮華經／願主仏国寺行善坊日受敬白／于時永禄七年甲子」 永禄七年(一五六四)につくられて仏国寺に置かれたものとおもわれる。仏国寺は信隆寺に近いところにあった寺で、現在は廃絶している。信隆寺が同じ日蓮宗であるところから、その名跡をついだものと伝えられている。

本堂に向かって左側に歴代住職の供養塔が並んでいます。寺を

辞す前にその中にある開基武田信就の供養塔を拝みました。形は江戸時代の典型的な宝篋印塔で、相輪(そ

うりん)に

「法」、笠に

「蓮」、塔身

に「華」、基

礎に「経」と

彫っており、「経」の横に「當寺開基俗名信就」「信隆院日閑□」とありました。またその近くには開山の善立院日意上人の供養塔もありました。

御開基は落武者の寺蟬時雨 (信隆寺を発つに際し)

② 小字塔の後の共同墓地にある石造宝塔と石幢(せきどう)

今宿二八二



小字「塔の後」の宝塔(ほうとう)

今宿の「塔の後(とうのうしろ)」という小字(こあざ)にある共同墓地にコンクリート造りの小屋があり、中に石造りの宝塔があります。

日本では宝塔は平安時代初期に木造の建物として現れました。これは真言宗の大日如来信仰に基づくもので、石造の宝塔は平安後期に現れたといわれています(*04)。石造の宝塔は日蓮宗でも作られるようになり、これは塔身に「むくり」があります。訪

れた宝塔も「むくり」があり、僧形(そうぎよう)の座像が刻まれています。昭和六十年度にこの塔を調査した齋藤彦司氏は「後刻と考えられる」と言っています(*05)。日蓮宗の宝塔は、『法華経』見宝塔品第十一に基づくもので、当地の塔身の僧形像が宝塔如来であれば間違いないものですが、如何せん如来の姿ではないません。齋藤氏はこの宝塔は「十五世紀初頭の宝塔の典型」としています(*06)。笠の上に載っているのは五輪塔の空風輪で混入です。小字「塔の後」の「塔」とは当該の宝塔を指していると言えるでしょう。

コンクリートの小屋の外に石幢(せきどう)があります。「石幢」とは石の幢(はた)という意味で、塔身は六角柱になって各面に地藏像が彫っており、六地藏となっています。一般の寺院本堂の天井から吊るしてある布や金属板の旗を六角柱に仕上げたのが石幢と考えられているそうです(*07)。塔身(六地藏の部分)の上に積んであるのは他の石造物の混入です。基礎に「先祖代々精霊菩提」「行き来の御方より、一遍(いつぺん)の御回向お願い申し上げ候らわん」という願文があり、行き来する人たちに亡くなった家族の回向を望んで建てられたものと分かります。東海道に立っていたのかもしれない。施主は「江戸神田三島町駿河屋亀田氏」とあり、家族四人の没年と思われる年号はありますが、建立の年はないようです(*08)。市内にはこの塔のほかには石幢は見つかっていません。

③ 咳気神

今宿四九六 路傍

地元で「ギヤーギお婆さん」と呼ばれている女性姿の石像です。結跏趺坐で合掌しています(*09)。市内には同じような呼

ばれ方をして、同型の事例が、小和田熊野神社境内(*10)と芹沢西組(*11)にあり、ともに気管支を病んだ子供の治療に効くとして、お茶や香煎を供える信仰がありました。同様の信仰は市内にとどまらず、研究者の間では咳を治す神、「咳気神」と呼ばれています。今宿の事例には文字は刻まれていませんが、芹沢の例には「寛文」(一六六一〜一六七三)の刻銘がり、市内の石仏の中では古い方に属し、指定文化財級の価値を有しています。

④ 妙厳山大乗院上国寺 今宿四八八

『風土記稿』(*12)には「妙厳山大乗院と号す。本寺、前(信隆寺)に同じ。寺記にいう、千葉大隅守胤貞兄弟、鎌倉に住せし頃建立し、大乗院日経を開山とす。応永四年(一三四七)寂す、年九十三。本尊三宝祖師を安んず。」と記されています。

ここに、開山は「日経」とありますがウキペディアの上国寺の項には、「大本山中山法華経寺に關係する中山浄光院の開基である大乗院日経が、応安年間(一三六八〜七五年)に師の浄行院日祐(大本山中山法華経寺三世)を開山に迎え創建した。寺伝によれば、その際に千葉宗家第九代・千葉宗胤の長男である千葉胤貞が助力したという」とあります。このウェブ事典の出典は分かりませんが開山は日祐となります。日祐についてウキペディアには「日祐(永仁六年〜応安七年||一二九八〜一三七四)は、鎌倉・南北朝時代の日蓮宗の僧。千葉胤貞の猶子」とあります。

胤貞はウキペディアに鎌倉末〜南北朝争乱期の武将で、延元元年||一三三六卒、とあり、上国寺と開基日祐と胤貞の關係が分かれます。胤貞は上国寺の開基であつたかもしれません。そうだと



永正11年(1514)

55 日蓮坐像(上国寺)

『茅ヶ崎市史』3-232頁

すると上国寺の草創は胤貞卒年の一三三六年より前となり、市内ではとても古い寺となります。

上国寺に到着したとき、法事は終わっていて、私たちは本堂に上げて頂き、目的の日蓮上人坐像などを拝むことができました。

市指定重要文化財のこの坐像については、『茅ヶ崎市史』3(※13)に次のようにあります。

木造日蓮座像 像高一四・〇センチ、寄木造、玉眼嵌入。後補と思われる彩色のために、わりに丁寧な衣文や顔の表現がつぶされているのは残念である。像の胎内頭部前面に墨書銘がある。三月日／永正十一年(一五一四)／作之。

像高は一四センチとありますがこれは誤植で、茅ヶ崎市役所のサイト、指定文化財紹介では三二センチとなっています。

『風土記稿』は日蓮宗寺院の本尊を「本尊三宝祖師」と記しています。ここで「三宝祖師」について考えてみます。「三宝」とは「仏・法・僧」を意味します。しかし「本尊に仏・法・僧を祭る」というのはどういうことでしょうか。辞書にも「三宝」に本尊の意味はありません。筆者は、「祖師」とは日蓮像のことで、「三宝」とは平成二十一年に県立歴史博物館で行われた特別展『鎌倉の日蓮聖人』図録五三

頁(※14)にある「一塔兩尊像」の組み合わせと解します。これは『法華経』の「見宝塔品第十一」(※15)に基づくもので、過去に法華経を説いてきた多宝如来と未来にかけて説く釈迦如来が巨大な宝塔の中に座し、賞賛を受けるといふ物語です。先の図録には千葉・神奈川両県の日蓮宗古刹に南北朝時代作成の一塔兩尊像が遺るとあります(写真は63頁)。上国寺でも内陣の奥には祖師像と新しいものですが一塔兩尊が祭られていました。

最後に山門のそばに建てられている日蓮上人五百五十年遠忌報恩塔(おんきほうおんとう)を拝見して上国寺を辞しました。弘安五年(一二八二)に卒した日蓮の五百五十年遠忌に建てられたものです。塔には天保二年(一八三一)の紀年銘と、造立にかかわった大勢の名前があります(※08の二二八頁)。五百五十年遠忌塔は多くの日蓮宗寺院にありますので、大掛かりに行われたものと思われます。

紫陽花や日蓮上人遠忌塔

(上国寺の遠忌塔を見て)

⑤ なんどき橋跡・⑥ 筏間跡

信隆寺の西隣に、昔は小さな流れ(『風土記稿』には「古相模川」とある)が南流し東海道を突っ切っていて、今宿橋という橋が架かっていました。『風土記稿』二八二頁今宿村には次のように記されています。

古相模川 一名筏川という、この川、村内にて長さ五十間(九〇メートル)ばかりの所は幅三十間(五四メートル)あり、さながら

池の如し。故に古池とも称す。東海道の係る所 板橋を架す
〔長さ六間半(一一・七¹尺)、今宿橋と呼ぶ。〕

この流れ、今は暗渠になっていて橋ありません。この橋の辺りが今宿村と中島村の境目でした。

今宿橋は地元では「なんどき橋」と呼ばれていました。夜中にこの橋を渡ると橋の下から「何どきだろ?」と問う声が聞こえたという伝説が伝わっています(*16)。古相模川は今宿橋のすぐ下流で東に流れを変えていました。『風土記稿』が述べているのは、九〇¹¹程は川幅が五四¹あり、池のようになっている、上流から来る筏を一時留めていたということです。この部分を地元では筏間(いかだま)と呼んでいたそうです。現地には今は流れのない川跡が空き地となって残っています。

⑦ 東チョウのサイノカミ 中島二五三路傍 (*08の三五三頁)

なんどき橋跡の国道一号と産業道路の交差点を西に渡り、国道の北側を西に進むと東チョウのサイノカミがあります。サイノカミ・セーノカミは、最近ほ道祖神と呼ばれています。中島は四チヨウナイ(本宿・東チョウ・西チヨウ・二ツ谷)に分かれていてそれぞれでサイノカミを祭っています。ここは祠の中に双体立像の神像一基と五輪塔の水輪が収められています。このタイプだと年銘などがあつたと思われませんが、今は摩滅して確認できません。この神の当地での役目は、チヨウナイの厄を背負うことです。正月に行われるサイトヤキ(どんど焼・だんど焼とも)はこの厄を焼き払う神事で、近くの空き地で今も行われています。

他のチヨウナイでは、本宿が明治十八年(一八八五)銘の文字塔(*08の二五二頁)、二ツ谷が文政三年(二八二〇)の双体立

像(*08の二五一頁)、西チヨウが明治十五年(二八八二)銘の文字塔と記年銘不明の双体立像を祭っています。

⑧ 小字「番屋」と広がる中島の耕作地

東チョウのサイノカミ横の小路を北に進むと畑が広々と続いています。この辺りの小字は、国道一号の北側一帯を「番屋」といいます。住宅は国道一号のふちにのみあつて畠には一軒の住宅もなく、昔の景観を留める今では珍しい風景です。個々の畑は境木のマサキで区切られています。この辺りは相模川の堆積作用を受けており、昔から肥沃で野菜類の栽培が今も行われているのです。

小字の「番屋」の由来として、洪水の時に相模川の水かさを見る所だつたという話が伝わっていますが、「番屋」という文字から考え出された説のようで、他の村には、村の出入り口に番人を置き、そこを「番場」という例がありますので、同類の場所だつたのかもしれない。

⑨ 西チヨウのサイノカミ 中島一三九路傍 (*08の二五一・二五二頁)

中島の国道一号(東海道)沿いの家々は、東の方が東チヨウ、西の方が西チヨウとなっています。かつては神仏の祭祀や人生儀礼などはチヨウナイごとに行われていました。西チヨウでは祠の中に二基祭られています。一つは双体像で、上下に二分したものを接着しており、銘がありますが摩滅して読めません。頂部に「妙法」とあり日蓮宗寺院が関係した江戸時代の像です。他は「明治十五年(二八八二)一月建立/道祖神/氏子中」とある角

柱の文字塔。正月には集められた飾り物でいっぱいになり、近くの相模川河原でサイトヤキが行われています。

冒頭にも述べましたように、ここで小雨がパラついて時間も押してきましたので、予定していた中島のめぐりは中止しました。

【参考文献 引用文献】

- *01 雄山閣出版（大日本地誌大系②）『新編相模国風土記稿』第三卷 二八二頁 信隆寺の記事
- *02 『ふるさとの寺と仏像』三八頁茅ヶ崎郷土会昭和五二年刊 信隆寺の鰐口
- *03 『茅ヶ崎市史』3・二二二頁 昭和五五年茅ヶ崎市刊 信隆寺の日蓮坐像
- *04 『日本石仏事典（第二版）』二九七頁 平成五年 雄山閣出版株式会社刊 宝塔の解説
- *05 市文化財資料集11集『中世の石造文化財』七〇頁 昭和六二年茅ヶ崎市教育委員会刊 「塔の後」の宝塔
- *06 *05の七一頁 「塔の後」の宝塔
- *07 *04の二二二頁 「塔の後」の石幢
- *08 資料館叢書13『茅ヶ崎の石仏』1鶴嶺地区二三四頁 平成二十七年茅ヶ崎市教育委員会刊 「塔の後」の石幢
- *09 *08の二二五頁 今宿の咳気神
- *10 資料館叢書15『茅ヶ崎の石仏』3松林地区二三六頁 小和田熊野神社の咳気神
- *11 石仏調査ニュース「茅ヶ崎の石仏」20号二頁 平成二七年茅ヶ崎市文化資料館刊 芹沢の咳気神
- *12 *01の二八二頁 上国寺の記事

*13 *03の二三三頁 上国寺日蓮像

*14 特別展図録『鎌倉の日蓮聖人 中世人の信仰世界』平成二一年神奈川県立歴史博物館

*15 岩波文庫『法華経』中 昭和五六年刊 一六八頁及び一八八頁 『法華経』の「見宝塔品第十二」

*16 資料館叢書6『茅ヶ崎の伝説』二九頁 昭和五六年茅ヶ崎市教育委員会刊 なんどき橋の幽霊

【参加の記】

「茅ヶ崎市内の東海道を訪ねる」④に参加して

茅ヶ崎市香川在住 染谷倫人

市内の東海道を訪ねるの四回目、史跡・文化財めぐりの要素よりも茅ヶ崎の原風景を堪能させていただきました。

旧き川の流れを知るや姫女苑

この句は筏間跡（いかだまあと）でヒメジョオンを見て詠みました。説明がないとこの俳句の意味合いはわからないと思います。（俳句においては、読者は実際にその風景を見ていなくてもわからないといけないと教えてもらっています。）

雨が少し降る中、旧相模川が暗渠となっている筏間跡に行きました。案内著が指をさして「昔はここから先を相模川が流れてい



川跡にヒメジョオンが群生

たといわれています。」と説明がありました。そこにはヒメジョオンが昔の川の流れそのままにずっと向こうの方まで咲き誇っていました。いかにもここは昔、川だったかのようにです。場所は産業通りと国道一号が交差する辺りなのですが、今までは近くを車で通りすぎても気付かなかった場所でした。また、行ってみたいと思います。

そのあと交差点に戻り、側溝と橋の跡のようなものを見ました。この側溝が旧相模川の跡であることに驚きました。自然は生きているのです

ね。また、この橋の跡が「何どき橋」の一部だったと聞き、今度できた道の駅に移る前のレストラン「なんどき牧場」がこの近くにあった理由がわかりました。名前の由来がわかるのは楽しいものです。

茄子取りの農婦と笑みを交はしたり

東チヨウのサイノカミから中島の耕作地を散策。平野会長の説明では、このあたりの風景が茅ヶ崎の原風景とのことでした。野

中島の北チヨウの北側に広がる耕作地
茅ヶ崎の原風景のひとつ 06.14.2025

跡文化財めぐりで知らなかった茅ヶ崎を発見をした次第です。途中、同行の参加者が、農作業中の女性に声をかけて会話をしていました。その光景が微笑ましく、俳句としました。(実際に茄子の収穫をしていたかは定かではありませんが。)

紫陽花や読経の響く午前九時

話は前後しますが、最初に訪問した上国寺さんでの様子です。平野会長や山本会員が下見をして、市指定重要文化財で御本尊の

菜畑が広々とあり、中島は畑作が主体だと理解しました。私の住まいは寒川との境にあり、水田を見慣れていて茅ヶ崎はどこでも水田が多かったと勘違いをしていました。水田があるのは寒川町でした。私の知っている範囲では、水田は浜之郷小学校の周辺にあるくらいで、今は茅ヶ崎では小出地区を除き見ることがありません。今回の史



上国寺 本堂で市重文の
日蓮上人坐像を拝する

06.14.2025

日蓮上人坐像を見せてもらえるように取り計らい本番を迎えました。しかし、上国寺さんに到着したところ法事の最中でした。案内者が法事が終わる時間を、お寺さんと打ち合わせしていたのに間違えたのだそうです。急遽、二番目に尋ねる予定の信隆寺さんに向かいました。

信隆寺さんでも本堂では法事の最中でしたが、お寺の開基である武田信就（のぶなり）奉納の鰐口を間近で見せていただきました。寺をあとして、咳気神（ぎやーぎお婆さん）を駐車場の片隅で見

学し、病気を治す庶民信仰の一端を見て、その表情を微笑ましく感じました。

それからもう一度上国寺さんに伺い、法事が終わっていた本堂に上げて頂き、目的の木造日蓮上人坐像を拝ませて頂きました。

今回は雨予報が出ていて、雨が降れば中止の予定で、実際途中で雨が降りだし、切り上げとなりました。天候や訪問先のご事情などを勘案しながら史跡文化財めぐりを企画運営されることに感謝の思いがいっぱいです。

追記になりますが、平松会員が地番のわかる現地の地図をご持参いただき、説明してくださいました。確かに小字（こあざ）が表示されている地図のレベルまで掘り下げた見学は、その土地の歴史がさらに良くわかると感じました。ありがとうございました。

【参加の記】

「甲斐との結びつき、江戸・大坂とのつながり」

井出康夫

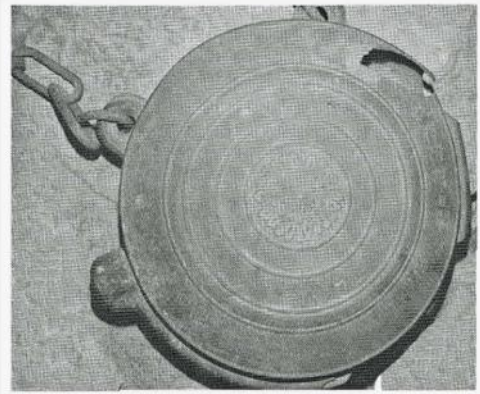
六月十四日（土）の「市内の東海道を訪ねる」では今宿から中島をめぐりました。今宿の「筏間（イカダマ）」を過ぎたあたりから雨が降りだし予定半ばで中止となりましたが、興味が尽きない史跡文化財めぐりでした。好奇心から後日調べたことも含め、当日感じたこと、考えたことを振り返ります。

甲斐武田氏所縁の信隆寺

最初に訪れた信隆寺では、ご法事のため市重要文化財「日蓮座像」は拝観できませんでしたが、同じく寺宝の「鰐口（ワニグチ）」を見せていただきました。通常はるか頭上に鰐口を見ますが目の前で拝見、想像以上に大きく存在感がありました。銘文には、甲斐武田氏に連なる武田信就（のぶなり）が先祖供養のため開基したと記されていて、信就は武田氏が織田・徳川連合に天目

信隆寺の鰐口

茅ヶ崎郷土会『ふるさとの寺と仏像』



— 38 —

山の戦いで敗れた後に、当地へ逃れて出家したようです。もともと相模川流域には武田氏所縁の一族が帰農した旧家が多いとのこと、このあたりは古くから甲斐との関わりが深かったように思えます。

長い歴史を誇る信隆寺ですが、昭和二十年の平塚空襲により焼失しました。この時「鰐口」は焼け残り今

も大切に保管、「日蓮座像」も当時のご住職の奥様が背負って避難したとのこと、当寺が歴代ご住職やご家族、檀家さんをはじめとした地域に守られてきたことがうかがえます。そして来訪者を温かく迎えていただいた若き副住職さんや、当寺で現在開かれてある「子ども食堂」に、今も地域に開かれた信隆寺を感じた次第です。

上国寺で身延講を想う

次の上国寺では市重要文化財「日蓮座像」を参拝、萩園の常願寺の像とともに三つの室町時代在銘の「日蓮座像」が市内にあるそうです。平野会長から、日蓮宗寺院がこのあたりに集まっているのは、信隆寺や上国寺の本山であった（今の日蓮宗は公式には本末関係は廃止しているようですが）下総中山法華経寺と甲斐身延山との中間という意味があるのだろうか、確かなところはわか

らないが、とのお話がありました。布教上の必要性なのか、元々信徒が多いからか、興味深い話です。

本堂左手には御会式などで使うのでしょうか、団扇太鼓が数多く置かれ身延講のことが頭をよぎりました。房総、相模からの身延山参詣の道中は分かりませんでした。山梨県立図書館によれば身延講は甲府から駿州往還（甲州往還、国道五十二号）沿いを下ったようです。『香川の歩み』四八頁に紹介されている香川三橋家「身延山道中記」には、身延山参詣、内房本成寺（富士市）での宿泊、沼津、三島といった道中が記され、北から富士川沿いを下ったことがうかがえます。路銀の明細には湯治、茶代、酒手（入足への酒手？ 実は講中の酒代？）などもあり、楽しい物見遊山だったのでしょうか。

路傍の神仏と人々の安寧

信隆寺の裏手で、小字「塔の後」の由来である「宝塔」、六地藏が浮き彫りされている六面の「石幢（セキドウ）」を拝見、上国寺の傍にある咳を治す「咳気神（ゲイキシン）」を巡りました。



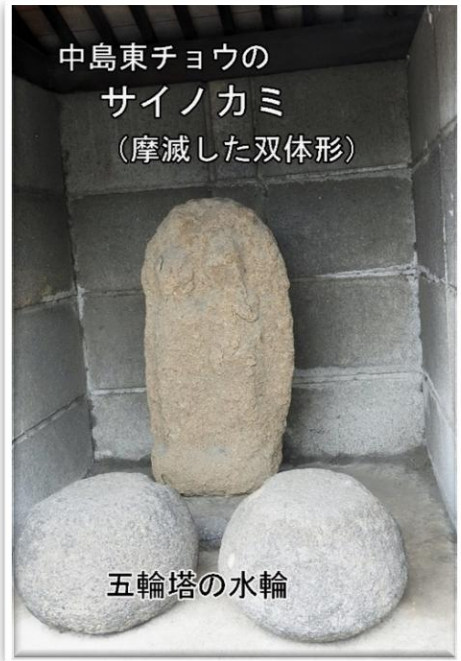
咳気神
(ギャーギお婆さん)

蔵が浮き彫りされている六面の「石幢（セキドウ）」を拝見、上国寺の傍にある咳を治す「咳気神（ゲイキシン）」を巡りました。

「咳気神」は「ギャーギーお婆さん」として親しまれているようで、百日咳や「はやり風邪（インフルエン



西チョウのサイノカミ

中島東チョウの
サイノカミ
(摩滅した双体形)

五輪塔の水輪

「ザ」のとき村人皆で祈ったのでしようか。江戸時代の川柳に「はやり風邪十七屋からひきはじめ」というのがあるそうで、十七屋は江戸の飛脚問屋、当時「はやり風邪」

村々にとって大変な脅威だったと思います。中島の東海道沿いの家々は、東の「東チョウ」、西の「西チョウ」に分かれていて、それぞれに祀られる「サイノカミ」も巡りました。「サイノカミ（道祖神）」は、外部から村落へ襲来する疫病や悪霊を防ぐ神で、行路・旅の神でもあるようです。

これら路傍の神仏に村人は生活と村の安寧を祈り、さらに「サイノカミ」は江戸、京・大坂を行き交う旅人の無事も見守ってきたように思えます。

川留（カワドメ）、馬入の渡し、間宿（アイノシユク）

「筏間」を過ぎたころ降りだした雨のため「馬入の渡し（跡）」の手前で帰途に就くことになり、川留に出くわした江戸の旅人の姿が思い起こされました。大坂に急ぐ鴻池の手代は気を揉み、参勤交代の勘定方は道中の掛かりに頭を抱え、御老公一行は訳あり若侍と相部屋、そして弥次喜多のような気楽な江戸っ子は三道楽にはまって居残り、いろいろな人間模様が浮かびます。何れも落語、映画などからの妄想ですが、「東海道中膝栗毛」の弥次喜多は、「客引き」から大井川の川留を知らされ岡部宿に逗留、さぞ誘惑も多かったことと思います。

江戸の守りのため橋がなかった相模川（馬入川）には、天然の堀として軍事的役割がありました。そのため舟による「渡し」が設けられましたが、しばしば増水により川留になったようです。村々には助郷の負担があった一方、「間宿」とされた南湖立場（茶屋町）では、浮世絵映える「左富士」に加え、川留も茶屋や旅籠の賑わいに一役買ったのでは、と想像が広がります。間宿での宿泊について幕府は禁止していましたが、禁令は度々出され

たようで十分に及ばなかったように見えます。茶屋町だけでなく、今宿、本宿という地名にも間宿の雰囲気を感じられます。

筏間、甲斐との結びつき、江戸・大坂とのつながり

「筏間」は、今は暗渠（アンキョ）となっている古相模川の今宿部分で、上流から流してきた筏を貯めていたことから、そう呼ばれていたそうです。甲斐「郡内地方」、今の大月市、都留市など山梨県東部ですが、ここからの材木を筏として相模川に流し、津久井の薪炭、竹木などを積み高瀬舟が下り、材木は柳島湊から江戸、大坂に海路で運ばれました。藤間家繁栄の源もここにあるように、相模川は重要な物流の大動脈でした。江戸時代の相模川は、甲斐などとの交易で南北に経済的機能を発揮し、東西では軍事的機能を果たしていたと言えます。今の「さがみ縦貫道路」は相模川水運を、七月にオープンした「道の駅」は柳島湊の賑わいを現代の形で再現したといったところでしょうか。

距離にして数キロでしたが、相模川を通じた甲斐との結びつき、東海道・海路による遠く江戸や大坂とのつながりを感じた、広がりのある東海道めぐりでした。

平野会長、山本会員、加藤会員の資料を参考にいたしました。心から感謝申し上げます。

【参考文献】

- 一 『茅ヶ崎市史』4 通史編 茅ヶ崎市、一九八一
- 二 『茅ヶ崎市史』1 資料編(上) 茅ヶ崎市、一九七八
- 三 「身延山図」山梨デジタルアーカイブ、山梨県立図書館
- 四 『香川の歩み』茅ヶ崎市香川自治会、一九七八

五 「インフルエンザは飛脚とともに」ヨミドクター（読売新聞

医療サイト）

六 「道祖神」、間宿（アイノシユク）『精選版日本国語大辞

典』小学館、二〇〇六

【参加の記】

「いかだま・なんどき橋」余談

野田 穂

二〇二五年六月十四日の「通算三二三回史跡文化財めぐり」に参加した際に知った「いかだま」と「なんどき橋」の位置関係が気になったので少し調べてみました。

江戸時代の相模川は、川筋の変動により、今宿の国道一号線と産業道路の交差点付近を流れていて、柳島地内を通り、馬入川（相模川の下流）に合流していました。『新編相模国風土記稿』には古相模川と書かれています。当時の輸送は東海道と並び舟運が盛んで、相模川の上流からは年貢の米や木材、薪・炭などが、上流に向けては塩などの生活用品が運ばれていたそうです。特に、津久井・丹沢地域と平塚の中原に幕府管轄の御用林があったため、江戸城の修理や江戸で大火があった際の木材供給、幕府が使用する造船用などで多くの木材が柳島湊・須賀湊に向けて流れてきました。木材の輸送は「筏流し」で行われていて、現在は多く

が暗渠になっている古相模川の今宿村の辺りは筏川とも言われていました。そして、今はない今宿橋(なんどき橋)のすぐ近くには、海上輸送船に乗せ替えるまで筏をためておく「筏間(いかだま)」と呼ばれる木場がありました。

「なんどき橋」は、昼間は往来の多い東海道の松並木に架かる今宿橋でしたが、夜になると不気味な静けさになり、橋を渡ろうとする人に「今なんどきだ」と女性の声が聞こえた……という茅ヶ崎の伝説です。

さて、この「なんどき橋」と「いかだま」、すぐ目の前の近きにあるのです。想像ですが、もしかしたら、水に浮かぶ木材のキィキキキィと擦れる音が「今なんどき」と聞こえたのかも？ 桑田佳祐さんなら「そうねだいたいね」とか答えてくれるでしょうか。

【参考資料】

○通算三三三回 茅ヶ崎郷土会 史跡文化財めぐり 市内の東海道を訪ねる(その4) 配布資料 二〇二五年六月十四日

○『郷土中島を語る』中島真平／驢馬出版 一九八六年

○『わたしたちの茅ヶ崎2017 社会科資料集』・『私たちの茅ヶ崎2011 中学校地域学習副読本』／茅ヶ崎市教育センター

○江戸時代の丹沢御林山守の活動と暮らし／秦野市役所(ミュージアムさくら塾 講師・椿田有希子 国際基督教大学)

<https://www.city.hadano.kanagawa.jp/www/contents/1691895856810/simp1e/20240810museum-sakurajuku3-tanzawaohayasi-505.pdf>

○歴史ばなしの舞台を行く6 中原御殿・御林(平塚市)／タウンニュース二〇二三年六月十五日

○『茅ヶ崎の民話』高橋昭和／長谷川書店 一九七三年

○資料館叢書6 『茅ヶ崎の伝説』郷土史研究グループ「あしかび」・茅ヶ崎市文化資料館編 一九八一年

○『新編相模国風土記稿』(現代文)／茅ヶ崎郷土会二〇〇〇

○猿江恩賜公園 <https://tokyo-eastpark.com/parksearch/sarueonshi>

猿江御材木蔵一江戸マップ／情報・システム機構
<https://codh.rois.ac.jp/edo-maps/owariya/14/1852/14-136.html>

此度 御本丸御普請ニ付、相州中原平塚御林

方御材木伐出筏引船ニ而、馬入川吐口方相州須賀浦通り江戸猿江御材木蔵迄致廻木候間、海上難船等之節其浦々ニ而、早速罷出引船差出紛失無之様大切ニ手当いたし其所へ揚置、最寄御代官へ早々致注進可請差図、若隠置ニおゐてハ可為曲事もの也

七	御材木極印	岩太御印	脩輔御印	主計御印	土佐御印	掃磨御印	能登御印	武蔵国方相模伊豆国迄
一	同切判銘							御料 私領村々 寺社領 名主 与頭

○『年中公触録』藤間柳庵／茅ヶ崎市史資料集二一九九九年

『年中公触録』は、柳島村名主役を長年勤めた藤間柳庵(善五郎)が、天保十三(一八四二)年から明治二(一八六九)年まで、幕府やその付属機関から発せられた触書(公文書)類を書き留めたもの。その中に十六件ほど木材の舟運に関する触書がある。

上の文書は、弘化元(一八四四)年五月に江戸城本丸が火災で全焼し、

再建が急務となった際に、平塚の御林から材木を伐採して相模川を筏引船で下り、江戸の「猿江御材木蔵」(幕府の貯木場。跡地は現在の東京都江東区猿江恩賜公園)まで海上輸送中に、船が難破した際には沿岸の村々で収集して確保するようにと出された触書の内容。

事業予定 令和7年9月～12月

『茅ヶ崎市史』4巻の輪読会○第14回9月2日(第一火) 13時30分～図書館第2会議室○15回10月7日(前同)○16回11月11日○17回12月2日

学習会 9月16日(火) 史跡・文化財めぐり事前学習「三島市の山中城めぐり」 13時30分～市民文化会館第4会議室
史跡・文化財めぐり 10月11日(土) 通算314回三島市に山中城を訪ねる(集合、コースなど検討中)

市民文化祭(茅ヶ崎みんなのアートフェス2025参加)

写真展 ○今までの史跡めぐり ○茅ヶ崎の風景など

11月14日(金)～16日(日) 市民文化会館A展示室

第53回茅ヶ崎市郷土芸能大会 11月23日(日) 13時開演

市民文化会館小ホール

事業報告 令和7年4月～8月

茅ヶ崎市史4巻の輪読会 ○第9回4月1日13時30分～図書館第2会議室○10回5月6日(前同)○11回6月3日○12回7月1日○13回8月5日(毎月第一火曜日)

学習会 ○7月15日(火) 13時30分～「民俗と歴史に見る浜

降祭」平野文明 市民文化会館第2会議室

史跡・文化財めぐり ○通算313回「市内の東海道を歩く」④

6月14日(土)。(本誌27頁から報告と参加の記あり)

茅ヶ崎郷土会総会 5月28日(水) 13時30分～市コミュニティ

イーホールA・B会議室(郷土芸能保存協会と連動して開催)

『郷土ちがさき』163号正誤表1

01頁 インパクトあります↓があります

09頁 下段 本文1行 ニューリアル↓リニューアル

15頁 ヘッダー 茅ヶ崎↓ちがさき

22頁 上段 13行 要点を次転記↓要点を次に転記

23頁 上段 18行 清明↓晴明

(HP掲載版は修正済)

【編集後記】

猛暑の中ですがたくさんの方の原稿を寄せて頂きありがとうございます。原稿が無いと会報は作れないので命の綱です。

戦後八十年です。原子爆弾を落とし、落とされ、もう戦争はしないと言ってから現世に戦いは亡くなったかという、そうではないのですよね。開戦の原因はああった、こうだったとは戦争が終わってから言われます。しかし、黒い水は知らぬ間に少しずつしみてきていて、あるとき決壊するということはあるのではないのでしょうか。私は不安なのです。

(編集子) —250—